0050276000

0050276-000

特225－454

標準国文問題新選

塚本哲三・編

有朋堂

昭和14

AHJ

標準

國文問題新選

塚本哲三編

有朋堂發行 株式會社

特225
454

國文問題新選

準標

塚本哲三 編

東京
有朋堂發行 株式會社

例　言

一、本書は中等學校の上級用・補習科用の副讀本として、國文問題研究の資料たらん事を期したものであります。

一、問題は凡て中等教科の程度にかなひ、高等學校や專門學校の入試問題傾向に順應して、之が標準たらん事を期しました。

一、全問題二百を、それ〴〵その中に含む所の助動詞に從つて二十の目に分ち、各目の中は、大體に於て古文・擬古文・和漢混淆文・俳文といふ順序に排列する事と致しました。

一、文法・假名遣は大體に於て現行中等教科書の樣式に準據しましたが、原作者の意識的又は習慣的破格と認められる類は殊更に改竄する事を避けました。

一、問題研究の資料たるが故に、句讀や註解は一切附けない事と致しました。

目次

なり・たり……一
なりけり……七
べし・べかり・べけむ……一二
つべし・ぬべし……一九
らん・らし・めり……二六
む……三四
まし……四〇
けん……四二
き……五〇
けり……五六
つ・ぬ……六二
たり・り……七〇
てん・なん・たらん……七八
てけり・てき・たりけり・たりき・りけり・りき・にけり・にき・にて……八七
ず・ざり……九五
じ・まじ……一〇二
す・さす・しむ……一一〇
る・らる……一一四
たし・まほし……一二〇
ごとし……一二四

書目別目次

【一】枕草子

〔三　九〕木の花は梅の濃くも薄くも……二六
〔六　六〕木は桂五葉柳橋……四三
〔九　四〕九月ばかり夜一夜降りあかしたる雨の……六二
〔一〇七〕三月三日うら〳〵とのどかに……七〇
〔一三五〕秋の野のおしなべたるなかしさは……八七
〔一五九〕鶯は文などにもめでたき物につくり……一〇二
〔一八八〕あすはひの木この世近くも見えきこえず……一二〇
〔一八九〕八月晦日がたに太秦にまうづとて……一三一

【二】大鏡

〔一　〇〕同じ御時に御遊ありし夜……七
〔四　〇〕世間の攝政關白と申し……一七
〔六　七〕左大臣は御年も若く……四三
〔七　六〕北野のかみにならひ給ひて……五〇
〔一三六〕かの筑紫にて九月十日菊の花を御覽じけるついでに……八八
〔一七二〕やがて彼處にてうせさせ給へり……一一〇

【三】增鏡

〔一　一〕八になり給ふぞ御兄ならんかし……一
〔三　〇〕大塔宮の令旨とて國々の兵をかたらひければ……一九
〔四　一〕隱岐には浦よりをちのはる〴〵と霞みわたれる空を眺め入りて……二七
〔六　八〕初雁の翼につけつゝ……四四
〔八　六〕石清水の社にて……五六
〔九　五〕かれては猛く見えし人々も……六三
〔九　六〕元弘二年の春にもなりぬ……六三
〔一二一〕正和も二とせになりぬ……七八
〔一四六〕六波羅の北なる檜皮屋には……九五
〔一七三〕夏の頃水無瀬殿の釣殿に出でさせ給ひて……一一二
〔一七八〕つれ〴〵に思さるゝ折々は……一二四

【四】東關紀行

〔六　九〕篠原といふ所を見れば……四五
〔九　七〕行き暮れぬればむさ寺といふ山寺のあたりにとまりぬ……六四
〔一〇八〕萱津の東宿の前を過ぐれば……七一
〔二四七〕齡百歲の半ばに近づきて……九六
〔一七四〕橋本といふ所に行き着きぬれば……一二三
〔一七九〕東山のほとりなる住家を出でて……一二五

【五】岡部日記

〔一　一〕曉ふかく出でて岡邊わたりをゆくに……八
〔四　二〕夕つけて箱根山にかゝる……二八
〔六　二〕今日は雲まよひて富士も見えず……四〇
〔一三七〕富士の山はひつじさるの空に見ゆ……八九
〔一八〇〕あはれ都にありつる程は……一一六
〔一九五〕くれはてて由井の宿にやどる……一二四

【六】歌意考

〔四　三〕大空の高き世の文を見るに……二九
〔一三八〕いと末の世と成りにては……八九

【七】鈴屋集

〔五　一〕此の庵のさま春は花見むとて櫻の林をまぢかくうゑなべ……三四
〔六　三〕明けくれ心へだてぬ友どちは……四一

【八】玉かつま

〔一　二〕世の中のよろづの事は……二
〔一　八〕よろづの事まづその本をよく明らめて……一二
〔一〇九〕花はさくら……七一
〔一三九〕むかしは皇國のまなびとて……九〇
〔一四八〕人の生れつきさま〴〵あるものなり……九六
〔一九〇〕世に名高き所などなば……一二二

【九】菅笠日記

〔一　九〕今日は多氣までものすべかりけるを……一三
〔一二二〕花は大かた盛すぎて……七九
〔一四〇〕八日きのふ初瀨の後雨ふらで……九〇

【一〇】おもひぐさ

〔三　一〕鶯の谷より出でし初聲に……二〇
〔四　四〕ふりはへてとはせ給ふみこゝろざしは……二九
〔四　五〕あしたにおきたるにも……三〇
〔七　〇〕有明のころものへまかるとて……四六
〔九　八〕あら〳〵しう吹きしなりし嵐も……六四
〔一一〇〕こゝち例ならずなやみ居て……七三
〔一八一〕大かた此の調度のもてなしにも……一一七

【一一】藤簍冊子

〔一　一〕あら玉の年を送り迎ふるわざこそ……八
〔二　〇〕須磨の浦傳ひする……一三
〔五　二〕田子の裳裾のひぢりこにそみつゝ……三四
〔七　七〕城崎に來て見れば……五〇
〔九　九〕蟬なく木かげのやどりに汗をぬぐひ……六五
〔一二三〕時はいつにもあれ……七九
〔一四一〕神無月の雲のけしき……九一
〔一四九〕睦月立ちなほ吹く風は寒きにも……九七
〔一六〇〕はぎの花女郎花くらりんだう……一〇二
〔一七五〕すゞりはや石の滑かなるをよしとす……一一三
〔一八二〕月はいと花やかに澄みわたるほど……一一七

【一二】春雨物語

〔一二四〕あづまの人は夷なり……八〇

【一三】うけらが花

〔一　三〕久かたの星の逢ふてふこころ……九
〔六　四〕あしたの霧の絶間より……四一
〔八　七〕おほよそ草木の花の……五七
〔一〇〇〕いでや白雲の舊年よりしも……六六
〔一二五〕秋こそ殊にといへるもうべなるかな……八一
〔一四二〕殘る日かずもはや二日三日となりぬるを……九二
〔一五〇〕池の藤なみ夏かけてにほへる頃……九七
〔一六一〕木高き松に枝かはせる楓の色……一〇四
〔一九六〕やがて月のみ舟とともに……一一五

【一四】琴後集

〔三　一〕古はみなもとなり……二
〔三　二〕谷水のながれかすかにおとずれ……二〇
〔四　六〕一夜のたびねはなほあかぬものから……三一

〔一一一〕昔父の世にいますがりし時は……七二
〔一二六〕今の世のくせにて……八一
〔一四三〕むかし人の茶の湯にすけるは……九二
〔一六二〕霞みていにし雲路の……一〇四
〔一八三〕山ぎはたどり行くほど……一一八

【一五】泊洎文藻

〔二　一〕時得る時は仕への道にいそしかりしも……一三
〔三　三〕古の書をかうがへて……二一
〔六　五〕神代もきかずとながめけん龍田の川の秋の末……四二

【一六】松屋文集

〔四　一〕たなつ物作るは……三
〔一二七〕もののあはれは秋ぞまされると……八二

【一七】檀園文集

〔一　四〕ねざめがちなる老の夜床に……一〇
〔三　四〕かみな月にもなりぬれども……二二
〔四　七〕年月のゆくへも知らぬ山がつはとよめりしやうなるすみかには……三一
〔七　一〕園の中にいともなつかしき竹むらあり……四七
〔七　八〕いといたうさえあかしたるあした……五一
〔八　八〕よろづの物ことわりの外におもむきあり……五七
〔一一二〕おもしろき海山のたゝずまひに……七三
〔一二八〕思ふどちまとゐして埋火かきおこし……八三
〔一六三〕柳はひろき庭の池のほとりなどに……一〇五

【一八】沽哉集

〔一一五〕ありとある木々のみづえさしつゝ……七五
〔一一六〕いとおくまりたる山寺の……七五

【一九】とはずがたり

〔一一四〕玉のうてなも膝を入るゝに過ぎず……七四
〔一五一〕まめしきは遠ざかり……九八
〔一六四〕あきびとのおのれらは……一〇六
〔一七六〕うたへを聽くわれなほ人の如し……一一三
〔一九一〕年のれぴまさるにつきて……一二二

【二〇】天朝墨談

〔五　一〕あがれる世にその名聞えし筆の跡……三

〔一一三〕 軒近くみづえさし茂りに茂りゆく木の …七四
〔一六五〕 手習ふわざばかり心ゆくものはあらじ…一〇六
〔一九二〕 秋は西といはまほしけれど……一二三

【二一】 六帖詠草

〔四 八〕 宮どころのふるきほどよりは ……三二
〔七 九〕 銅駝坊のあたりにしる人のもたる家あり ……五二
〔八 九〕 里のかたにゆけば ……五八
〔一〇一〕 何ごとをなすともなくて ……六六

【二二】 志濃夫廼舍歌集

〔一四四〕 湊河なる楠正成朝臣の墓石の文字を ……九三

【二三】 布留の中道

〔五 四〕 歌よまむするやう書きたるものは ……三五
〔一八四〕 歌はこの國のおのづからなる道なれば…一八

【二四】 こぞのちり

〔一 五〕 物にせまりて急にいふ詞は ……一〇
〔二 二〕 漢語梵語も今は國語同前なるは ……一四
〔五 三〕 鶯のさゝばなきは ……三五

【二五】 閑田文草

〔八 〇〕 寢ざめの枕にとしごろ分け見しもみぢの山々を ……五二
〔一六六〕 始あるものの終ある理はしらぬ人もなけれど ……一〇七

【二六】 閑田耕筆

〔四 九〕 飼鳥を好む人は非にして ……三三
〔八 一〕 おのれ幼より蒲柳の資にて ……五三
〔一〇三〕 茶の湯の益は ……六七

【二七】 年々隨筆

〔六 〕 隨筆は見聞く事いひ思ふ事 ……四
〔五 〇〕 友だち四五人ばかり一とせ嵐山の花見に行きし事あり ……三三
〔七 二〕 梅の花いとめでたし ……四七
〔九 〇〕 卯月に聞のありける年 ……五九
〔一一七〕 朝夕とうつりゆく一年のほどに ……七六
〔一二九〕 くちなしはめでたけれど ……八三

〔一五二〕 あなあはれ世はあぢきなきものなり ……九八

【二八】 遊京漫錄

〔一 六〕 都より東へかよふ旅にして ……一一

【二九】 花月草紙

〔一 七〕 學問は人の道まねぶことなり ……五
〔一 七〕 花の散るはうてなの中の實の ……一一
〔三 五〕 久方の空にまかせて ……二三
〔一〇二〕 春も老い行くころ ……六七
〔一三〇〕 暑さに堪へかねる頃 ……八四
〔一五三〕 櫻は風に散りかふも ……九九
〔一六七〕 人を貴むるはあらはなるを貴むべしとか聞きし ……一〇七
〔一九七〕 詠歌大概に情は新を先にすといふことを ……一二六

【三〇】 樂訓

〔二 三〕 年々に花は相似たれど ……一五
〔七 三〕 櫻のほころび出でたるこそ ……四八
〔一〇四〕 雨風に花はあとなくなりはてて ……六八
〔一五四〕 世の人まどしくしては憂ひ苦み ……一〇〇
〔一六八〕 夏もやう〳〵深くなりぬれば ……一〇八
〔一九三〕 折待ち得たる杜鵑の初音まづなつかしくて ……一二三
〔一九八〕 梓弓はる立ちしより ……一二六

【三一】 駿臺雜話

〔二 四〕 枚乘が吳王を諫むる書に ……一五
〔三 六〕 昔西行法師伊勢の神祠に詣でて ……二三
〔五 五〕 なに事にてもあれかれて ……三六
〔八 二〕 春秋のあはれないひ ……五四
〔一〇五〕 たとへばものないふにも ……六九
〔一五五〕 昔よりもろこしやまと共に ……一〇〇
〔一九四〕 我儕古人をしたひて其の書をよみ ……一二四

【三二】 たはれぐさ

〔九 一〕 或年長けて子をもちし人 ……六一
〔一一八〕 たはれたるものの言葉も ……七六
〔一六九〕 世の中ほど思ふやうならぬものはあらじ ……一〇九

【三三】雲萍雑志

〔二　六〕愚者は不用の財を貪るに勞し……一六
〔五　七〕何によらず物の少きは長久のもとなり…三七
〔八　三〕人の世にあること舟に乘合ひて……五四
〔一三二〕木曾の山中など深山幽谷にて……八五

【三四】梅園叢書

〔八　一〕武王以二甲子一興紂以二甲子一亡といふ事あり……五
〔二　五〕世話に身をつめりて人の痛さを知れとは……一六
〔三　七〕人各聖人にあらざれば……二五
〔五　六〕靈驗は我が信の有る所にあり……三六
〔一三一〕諺にも陰陽師の門に蓬たえずとて……八四
〔一八五〕勝つことをこのむは人情の常……一九
〔一九九〕貧き人富める人の隔あるべからず……一七

【三五】野ざらし紀行

〔五　八〕長月の初古郷に歸りて……三七
〔七　四〕富士川の邊を行くに……四八
〔九　二〕西上人の草の庵の跡は……六一
〔一五六〕二十日あまりの月かすかに見えて……一〇一

【三六】奥の細道

〔九　一〕山形領に立石寺といふ山寺あり……六
〔八　四〕清水ながるゝの柳は蘆野の里にありて…五五
〔一〇六〕心許なき日かず重なるまゝに……七〇
〔二〇〇〕此の寺の方丈に坐して……一三七

【三七】芭蕉翁文集

〔二　七〕すべて山居といひ旅寢といひ……一七
〔一八六〕姨捨山は八幡といふ里より一里ばかり南に……一九

【三八】ひとり言

〔五　九〕七夕の日は誰もとく起きて……三八
〔七　五〕雁はひとつ〳〵山こえて……四九
〔一三三〕つゝじ藤山吹……八六
〔一五七〕新しく作りたる句は……一〇一
〔一五八〕煤拂は人の顔みな埃におほれて……一〇三
〔一七〇〕未熟にしてわれこそ熟したれとおもへる人は……一〇九
〔一七七〕躍はかたちより心を狂はせ……一一四

【三九】鶉衣

〔二　八〕見よや人の老いゆけば……一八
〔三　八〕もろこしには鐘馗といふ者ありて……二五
〔六　〇〕子を持てるものは……三八
〔八　五〕今日はこの事かの事にさはる事あり……五六
〔一二〇〕倔織鈴蟲くつわむしは……七七
〔一三四〕用をかきても寐よとにはあられど……八六
〔一四五〕こよひは鬼のすだく夜なりとて……九四
〔一八七〕鰹は芥子鮓の風味……一三

【四〇】おらが春

〔二　九〕南無阿彌陀佛といふ口の下より……一八
〔六　一〕今年はみちのくの方修行せんと……三九
〔九　三〕おのれらは俗塵に埋れて……六一
〔一七一〕おのれ既に六十の坂登りつめたれど……一一〇

標準

國文問題新選

なり　たり

【一】八になり給ふぞ御兄ならんかし北山におはするほど夕暮の空いと心すごう山風荒らかに吹きて常よりも物悲しく思されければ

庭松緑老秋風冷　薗竹葉繁白雪埋

つくづくとながめくらして入相の鐘のおとにも君ぞ戀しき

幼き御心にもはかなくうちひそみ給へるいと哀なりここもかしこも盡きせず思し歎くさまいはずとも皆推し量るべし（增鏡）

【二】世の中のよろづの事はみなあやしきをこれ奇しく妙なる神の御しわざなることをえしらずして己がおしはかりの理をもていふはいとをこなりいかにとも知られぬ事を理を以てとかくいふはから人のくせなりそのいふところの理はいかさまにもいへばいはるるものぞかれいにしへのから人のいひおける理後世にいたりてひがごとなることのあらはれたる事おほしまたつひに理のはかりがたき事にあへばこれを天といひてのがるるみな神ある事をしらざるゆゑなり（玉かつま）

【三】古はみなもとなり今は末なりその源にありてはもとめずともおのづからにすみ行くながれに從はむ事はやすかるべきを後にありてはあくたを拂ひてことさらに清き瀨をたづぬ

るわざなればいとかたしともかたしや（琴後集）

【四】たなつ物作るはいともいともからき業なれどさなへとる樣は苦しげにも見えず歌うたひのしりてこころゆくけしきなり若き女どものきたなげならぬ赤きたすきかけなどさるかたに花やかなるよそひしており立ちあるは苗をあまたこに入れ畔づたひはこびもてゆきあるは媼のかれいひをあやしきものに入れて持ちつつうまごをゐて來てあこよあこよと呼ぶなどさまざまくだくだしきことのさすがにあはれなる事ども多かり所につけてはかかるものをかしき見ものになん（松屋文集）

【五】あがれる世にその名聞えし筆の跡まれまれおちとどま

れるがあなるをいかばかり目驚くものならむと思ひたるに何の事もなくまめやかなるものなればはえなき心地するを再び見ればいとおもしろくおぼえ三度見ればいよいよ味ひ出でたりいと大きく見えていとも尊くいひしらぬ匂加はりぬかくて見るたびごとに尊さいやまさりあくよなくおぼゆ（天朝墨談）

【六】隨筆は見聞く事いひ思ふ事あだ事もまめ事もよりくるに隨ひて書きつくるものにしあれば常にはいとよく知りをる事も忘れてはひがごといひ淺まなる考どもも立ちまじり文章も艶にこまやかにはふとえ書きとらでこちごちしく拙き事などもありてさまあしき物ながらさるつくろひなきものなる故心いき才のほど器のかぎりも見えてなかなかおもしろきもの

なり（年々隨筆）

【七】學問は人の道まねぶことなり漢詩つくり文つくるはせんなしとよく人のいふことなれどみやびは花のかをりの如く物のうるほひの如しまいて彼の國の文字をおぼえて書よむとも文字のつかひざまにて深さ淺さの違ひめあるものにて彼の國の人のごとは知り得がたかんめれどさすがに漢詩つくり文つくればおのづから言葉の外なる心をも得るものとかや聞きぬされば爲すにはしかじかしなどてこれを禁ずべき（花月草紙）

【八】武王以甲子興紂以甲子亡といふ事あり周の武王殷をせめ甲子の日にあたりて殷紂王を亡し給へり同じく甲子なれど

も武王のためには吉日にして紂王のためには悪日なり湊にかかる船の東にゆくは西風を順風といひ東風を悪風といふ又西にゆく船のためには東風順にして西風不便なりもとより風に順逆はなくわがゆくに順逆あり日に吉凶なし我に吉凶ありとかく悪しき事をする日はすべて悪日なりよき事をする日はすべて吉日なり吉凶豈に外にもとむべけんや（梅園叢書）

【九】山形領に立石寺といふ山寺あり慈覺大師の開基にて殊に清閑の地なり一見すべきよし人々のすすむるによりて尾花澤よりとつてかへし其の間七里ばかりなり日いまだ暮れず麓の坊に宿かり置きて山上の堂にのぼる岩に巖を重ねて山とし松柏年ふり土石老いて苔滑かに岩上の院々扉を閉ぢて物音きこえず岸をめぐり岩を這うて佛閣を拜し佳景寂寞として心すみ行くのみおぼゆ

閑さや岩にしみ入る蟬の聲（奥の細道）

なりけり

【一〇】同じ御時に御遊のありし夜御前の御階のもとに躬恒をめして月を弓張といふこころは何の心ぞこれがよし仕うまつれと仰せごとありしかば

てる月を弓張としもいふことは山邊をさしていればなりけり

と申したるをいみじう感ぜさせ給ひておほうちき賜はりて肩にうちかくるままに

白雲のこの方にしも下り居るはあまつ風こそ吹きてきぬらし

いみじかりしものかな（大鏡）

【一一】あら玉の年を送り迎ふるわざこそ千年のいにしへ今のうつつ人も變らぬ喜びはすなりけれ春のまうけつかさつかさの衣はかまの色あひゆほびかに新ならんがめでたし民草もおのがほどほどにつけて染めぬひするめでたし貧しきは解き洗ひ調ずる急ぎのあはれながらそもよろこびする心ばへなんおろそげならずめでたし（藤簍冊子）

【一二】曉ふかく出でて岡邊わたりをゆくに山もとの木ぐれに

所々ほかげの見ゆるを夜ぶかく出できたる里人に問へば鹿火なりといふ山田のくろにおくかび是なりけり山賤の思ひめぐらさでいひなれたる詞こそまことなりけれなほ谷かげ行手の田面に薄くきりわたれるが中にむらむら立ちのぼる烟に朝霞かびやが下おもひしられていと興あるあけぼのなり（岡部日記）

【一三】久かたの星の逢ふてふころ荻の上風身にしみそめてよりさを鹿の妻とすなる萩が花に眞袖をにほはし遠つ人はつかりがねに玉章の便をかこち中ばの秋の月の光には千里の外をおもひしにはや峯の柞野べの淺茅のうつろひゆくより草木ことどとただならぬぞ秋のあはれのとぢめなりける（うけらが花）

【一四】ねざめがちなる老の夜床に山風さむく吹きとほして一しきり降りきほふはしぐれにはあらで霰の音なりけりほどもなき槇のいたやは枕の上に散りかかるやうにおどろおどろしう雲のたたずまひも思ひやられていみじう心すごきに月の光のはつかにもりくるはかたへ晴れたるにやと空のけしきもゆかしければ窓あけてや眺めましとみじろきゐたるほど又もはらめきおつる音のはげしきに心よわくふすま引きかづきて

（櫻園文集）

【一五】物にせまりて急にいふ詞は思惟を待たねばその詞皆わが眞心に落つることなり言を飾らずしておのが心をいふなれば無情の物にもこころあるが如くいふ又をさなくいふこれぞ歌の本心なりける深く思慮して左右のよしあしを定めかへり

見て後にいふは眞心ならず歌ならずと知るべし（こぞのちり）

【一六】都より東へかよふ旅にして山路けはしくはたおもしろきは玉くしげ箱根の峯の續きなりけりそのこなたは三島の宿とて御社の森かうがうしく春は霞の衣をきそへ秋は霧のとばりをかけて花のあや紅葉の錦をいろどり重ね夏は綠の梢うすく濃く冬は四方の雪に白がさねたたみさげたるさますべていはんかたなくをかしけれ（遊京漫錄）

【一七】花の散るはうてなの中の實の大きやかになりて花瓣の居どころなき故に散るなりこの雨に花は散りぬといふは雨のうるほひにて彼の實の大きくなればなり秋冬に至りて葉の落

つるは若芽の莖のうらより芽ぐみてその若芽の大きくなれば古き葉の居どころがなければ散るなりけり　（花月草紙）

べし　べかり　べけむ

【一八】よろづの事まづその本をよく明らめて末をば後にすべきは論なけれど然のみにもあらぬわざにて事のさまによりては末よりまづ物して後に本へはさかのぼるべきものあるぞかし大かた言の本の意はしりがたきわざにてわれ考へえたりと思ふもあたれりやあらずやさだめがたく多くはあたりがたきわざなりされば言のはの學問はその本の意をしることをばのどめおきてかへすがへすもいにしへ人のつかひたる意を心をつけてよく明らむべきわざなり　（玉かつま）

【一九】今日は多氣までものすべかりけるを雨いみじうふり風はげしくて山の上ゆく程などはみの笠を吹きはなちつつようせずば谷の底にもまろびおちぬべう吹きまどはすになほゆくさき聞ゆる飼坂もあなるをかくてはえ越えやらじとて石な原といふ所にとまりぬ　（菅笠日記）

【二〇】須磨の浦傳ひする今日は海の面などやかに百船のゆきかひ苅菰のうち亂れつつ渚には釣ほこりて遊ぶを見ればこの磯山松の色も人々の眼もひとつ綠なるざえある人も口とづるわたりをまいて打出づべうもあらず　（藤簍冊子）

【二一】時得る折は仕への道にいそしかりしも時失はば又しづ

けさを樂みて盛なるを喜ばず衰ふるをもくやまずよく天地のおのづからなる理を思ひとりて世につれ時に從ひ身をみさをにもてつけ羨まず歎かず其のほどほどに心を慰めうき沈む世の淵瀨をやすく流れ渡るこそ行く水の清き眞心とはいふべく世を身のままとし身を又心のままとすとはきこゆべけれ

（泊洒文藻）

【二二】漢語梵語も今は國語同前なるは嫌ひなく歌にいふべきものながら其の選びをせねばならぬことになりてより歌學びよくせずばいはれぬことになりたるなり今の人の平語の如く歌詞を自由にせずばおのが心のままをいひいづること難かるべしされば かく詞のよしあし其の姿などを習ひ得て其の後に詠むことになりたるはいと悲しきわざならずや

（こぞのちり）

【二三】年々に花は相似たれど年々に人は同じからず老かさなれば一とせの内にもやうやく衰へ行きて今の昔にしかず後の今にしかざる事を知りてかねてより悔なからん事を思ひ時日ををしみ一日もいたづらに過すべからず今日暮れて明日もありとて賴むべからず今日の日の内を日々にをしむべし

（樂訓）

【二四】枚乘が吳王を諫むる書に「欲二人勿一聞。莫レ若レ勿レ言。欲二人勿一知。莫レ若レ勿レ爲」此の語淺きに似て味ふかし名言といふべし口にいうて人の聞かぬやうにし身になして人の知らぬやうにとするはいやしきたとへながら惡に利息を添へて身に負ふが如し日にそひ月にそひて其の負まさりなばいかでおほひ隱すべき

（駿臺雜話）

【二五】世話に身をつめりて人の痛さを知れとは賤しき俚語ながらよく道にかなへり身の痛き事をしらば人も痛かるべしとしりて人に施さぬなりよろづにつき人の善悪は見えて身の善悪は見えぬものなりさるを人の善を見ては是にしたがひ悪を見ては身に懲りなば何れか教の道にあらざらん或は我が子のわれに不孝なるを見てはわれこの道を以てわが父につかへざれ我弟のほしいままなるを見てはわれこの道を以てわが兄につかへざれ我が身に骨の折るる事は人の身にも骨折れ我が身に悲しき事は人の身にもかなし一切みなしかなり是を恕といふ（梅園叢書）

【二六】愚者は不用の財を貪るに勞し賢者は用の財を造るに樂しむ不用の財は限りなし用の財は限りあり限りある身を以て限りなき財を求めば死に至るまで貪欲盡くることなしされば身を勞して財を聚むる時は其の身終れり用の財は用の足ることをこのむがゆゑに壽を養ふ財に不用といふことあるべからずとおもふものあれども日用の外散ずる財はみな不用の財なり（雲萍雜志）

【二七】すべて山居といひ旅寢といひさる器貯ふべくもなし木曾の檜笠越の菅蓑ばかり枕の上の柱にかけたり晝はまれまれとぶらふ人々に心を動かしあるは宮守の翁あるは里のをのこども入り來りて猪の稻食ひあらし兎の豆畑に通ふなど我が聞き知らぬ農談日既に山の端にかかれば夜座靜かに月を待ちて

は影を伴ひ燈を取つては罔兩に是非をこらす（芭蕉翁文集）

【二八】見よや人の老いゆけば目は遠山の霞棚引き耳には鳥蟲の聲もうとく口は冬がれの齒も落ちて盛衰まのあたり悲みを催すたとへ百年のつくも髪だに鼻ばかりはかけもやらずつぶれて用をかく事もなしひとり常盤の操を守りて時しらぬ山とも稱すべけむ（鶉衣）

【二九】南無阿彌陀佛といふ口の下より慾の網をはるの野に手長蜘蛛の行ひして人の目を掠め世渡る雁のかりそめにも我が田へ水を引く盜み心をゆめゆめ持つべからず然る時はあながち作り聲して念佛申すに及ばず願はずして佛は守り給ふべし

（おらが春）

つべし　ぬべし

【三〇】大塔宮の令旨とて國々の兵をかたらひければ世に恨ある者などここかしこに隱ろへばみてをるかぎりはあつまり集ひけり宮は熊野にもおはしましけるが大峯を傳ひて吉野にも高野にもおはしまし通ひつつさりぬべき隈々にはよく紛れものし給ひてたけき御ありさまをのみ顯し給へばいとかしこき大將軍にていますべしとて附き隨ひ聞ゆるものいと多くなり行きければ六波羅にも東にもいと安からぬ事ともてさわぎてまづかの千早を攻め崩すべしと云へばつはものなど上り重なると聞ゆ（增鏡）

【三一】鶯の谷より出でし初聲に世もおしなべてはるめきつつ
やうやう風なつかしう吹きわたして大かたの花の木どももけ
しきばみ梅は今をさかりにてにほひかすむ大空ののどけさに
そこはかとあくがれ出づる春の光かしらの雪もきえ果てぬべ
く老いたるも若きもおのがじしきよらを盡しとがむばかりの
香にしみたるくれなゐの袖ふりはへてゆきかふ人を待ちまう
けたるかりのゆかなどにしばしやすらひつつまづとう出て火
もてことといひたるにきよげなる女のあはあはしげにもて出で
てなめげにさしおきたるさるがふ事などいひあざれたるいと
をかし（おもひぐさ）

【三二】谷水のながれかすかにおとづれ松の聲は遙かに響きて

散りのこる尾上の花は猶わかれ惜みがほに匂ひ霞をもるる鳥
のさへづりはさらに我をとどむる心地のみしてうららと永
き春日も今日はた晝間すぐるをだに知らざりけりかくても斧
の柄はくたしつべくなむあるや（琴後集）

【三三】古の書をかうがへて古の人の心しらひをうかがひ古の
歌をあぢはへて古の人の詞づかひをわきまへさて後には今の
世にありとあらゆることぐさを書にも作り歌にもよみぬべき
ことなりそこに心うとき人たちは古のふみら朝夕にし古の歌
どもそらにうかぶとも心もちひ大よそならんからにはその詠
みいづる歌ただ古人の口まねびばかりにてたとはば形にそへ
る影のたちゐふるまひ違はず見ゆるものから手にさはらふこ

となきにひとしかりぬべしいと口惜しく心おくれたるわざにはあらずや（泊洒文藻）

【三四】かみな月にもなりぬれどもみぢはなほ薄色にて菊のみやうやう盛なるはいたう時おくれたる年なるべしきのふけふことに晴れてうららなる日影はさすがに小春とかいふやうにて浮れも出でぬべくおぼゆるにはかに雲たちいでて山風あらましく吹きおろしつつさとふりくる雨のあわただしきはまことに冬のしるしにていとをかしく打ちながめらるるにきれぎれなる雲の立ちまよひつつかたへ晴れゆくもげにさだめなき空のけしきになむ（檀園文集）

【三五】久方の空にまかせて我がささやかなる才を用ひざれとはいへど空にまかするに深き心あるべし星の光みてもはや沖はあらき風吹出でつ此のあたりへは明日の晝つかた吹き來べしといふ事も知れれば心して乘るを空にまかするとは言はめ沖の風吹くも吹かぬも問はずして今ここの波平かなればはや漕ぎ出でて行くを空にまかすとはいはじもの食ふものにてもあれすべて身をやしなふ道をつくしそのほどを愼みて後生死をそらに任すべきをやしなひのことは心とせずただ己が欲りすることにのみ隨ひて生死をそらに任するといふこともありぬべし（花月草紙）

【三六】昔西行法師伊勢の神祠に詣でてよめる歌に

なに事のおはしますをばしらねどもかたじけなさに涙こぼるる

なに事のおはしますともしらずしてかたじけなさは何事によるや涙は何故にこぼるるや是れ誠の感動にあらずして何ぞ神前にて其の心他念なく一筋に誠になれば神も其の誠のなりに來格して迭に感動する程に涙もこぼれつべしたとへば清くすめる水には其のまま月のうつりてたがひに光をますが如し久しくなれば一つ誠に渾融して神と人とをわかずたとへば水や空空や水ひとつに通ひてすめるが如しここに至りては洋々乎として其の上に在るがごとく其の左右に在るが如くなるべし是れ神のあらはるるなり誠のおほふべからざるなり　（駿臺雜話）

【三七】人各聖人にあらざれば其の非を見付けていはんには誰かあやまちなかるべき譬へば刀は紙をきり楊枝をけづり梨柿の皮を剝くが如き一切日用の事にもちひんには小刀には遙におとりぬべしさらばとて敵にのぞみ戰をいどむにあたりて小刀何の用にか立つべき小刀のよき所あり刀のよき所あり刀のなす所小刀用にたたず小刀のなす所刀用にたたずといへども其の一體を論ずるに小刀は刀と同じく論ずべき物にあらず

（梅園叢書）

【三八】もろこしには鐘馗といふ者ありて能く鬼を逐ふとぞ其の容を見るに眼を怒らし臂を攘げて長劍をふり廻せばげに鬼は恐れつべしされども騷がしき其の中へは用心ふかき福の神は怪我を氣づかひあぶながりてあたりへは寄りつき給ふまじ

かしこき我が國のならはし年々の節分にはひよわき親仁も年男と名のりて二句の文を唱へ豆をつかんで蒔きちらせば鬼は外へと逃げちり福の神は呼ぶに隨ひ煎豆の香にめでて入りかはり給ふこそめでたけれ（鶉衣）

らん　らし　めり

【三九】木の花は梅の濃くも薄くも紅梅櫻の花びらおほきに葉色こきが枝ほそくて咲きたる藤の花しなひ長く色よく咲きたるいとめでたし卯の花は品おとりて何となけれど咲く頃のをかしう杜鵑のかげにかくるらんと思ふにいとをかし祭のかへさに紫野のわたり近きあやしの家どもおどろなる垣根などにいと白う咲きたるこそをかしけれ（枕草子）

【四〇】世間の攝政關白と申し大臣公卿ときこゆる古今のみなこの入道殿の御有樣のやうにこそはおはしますらめとぞ今樣のちごどもは思ふらんかしされどそれさもあらぬ事なり言ひもて行けば同じ種一つすぢにてあれど門分れぬれば人々の御心もちひも又それに從ひてことごとになりぬ（大鏡）

【四一】隱岐には浦よりをちのはるばると霞みわたれる空を眺め入りて過ぎにし方かきつくし思ほし出づるに行方なき御涙のみぞとどまらぬ

羨ましながき日かげの春に逢ひて汐くむ海士も袖やほす

らん

夏になりてかやぶきの軒端に五月雨のしづくいと所せきも御

覽じなれぬ御心地にさまかはりて珍しく思さる

あやめふくかやが軒端に風過ぎてしどろに落つるむら雨の露

初秋風のたちて世の中いとどもの悲しく露けさ増るにいはん方なく思しみだる

ふる里を別路におふる葛の葉の秋はくれどもかへる世もなし　（増鏡）

【四二】夕つけて箱根山にかかる關まではくるしとて畑といふ所にやどるいとはや夜寒なれば寐も入らぬに瀧の音鹿の聲うちこめたる山の秋風聞きあかされて立出でぬほのぼのと明けゆく山のかひよりかへり見れば朝霧白くたちわたれるは海を見ん心地す關こゆるほど日さしのぼりて湖の面のどかに見わたさるかなたこなた山をめぐれる水の面は三巴といふや似つらん蠶叢に擬したる人は誰ばかりなるや其の後いくそばくの人か望み見けむこの湖にさせる聞えなきぞあやなき　（岡部日記）

【四三】大空の高き世の文を見るに高山のさかしく道も絶え青海原のかしこくしておくがも知らず春の月の中空の霞に隔て秋の風のよその木の葉も吹き交べつらんと覺ゆる事あり下れる世人は其の霞に迷ひてあらぬ方に至りあるは言さへぐよそ國の風に誘はれて本立を忘るる類ひぞさはなる　（歌意考）

【四四】ふりはへてとはせ給ふみこころざしはさるものにて雪

こそ深く侍るめれ道のほどもおぼつかなしあかりの御まうけやさぶらふまゐらせてむやなど聞えつつずさよばすればねぶり居たるが顔ふくらしあくびうちして走りくるもをかし立ちいづるほどおくより御たばこいれなむ残りて侍りきとてわらはべのもて出でたるこは忘れにけりとてふところにさしいれていぬめり（おもひぐさ）

【四五】あしたにおきたるにもまして物くひたるにもぬるにも大かたはなるるをりこそなけれかう常にけぢかくしたしきものはなにかはあるさるをいみじき願たてものいみなどして七日もしは十日などたちゐたらむほどにぞ常はさしもおもはぬ此の君の一日もなくてえあらぬことをばしるらむかし（おもひぐさ）

【四六】一夜のたびねはなほあかぬものから散り散らずとか待つらむ人もあめればけふはたちかへらむとするを花のたよりならでは又かかる人めをも見じなどあるじは止めまほしげなれど鶯に身をあひかへばとてわかれにけり（琴後集）

【四七】年月のゆくへも知らぬ山がつはとよめりしやうなるすみかには改りし春のしるしもなきものからきのふけふ晴れわたりぬる日影に峯のかすみも立ちそめてやうやう瀧のひびきのきこゆるはうち出づらむ浪の初花のけしきもおもひしられぬされどなほ松の雪はきえもあへず朝夕風の身にしみわたるに鶯のいとうらわかき聲に鳴き出でたるは谷よりいづるとま

づうちずせられていとうれしう　（樞園文集）

【四八】宮どころのふるきほどよりはすこしあらはなりとおもひしもこのごろの雨に梅やしげりつらんおくまりて見えみとしろ水ゆたかにたえぬめぐみをうけつつをちこち千まちつくれる田面いとたのもしく今かへすもあり青みわたれる中に白鷺のむれゐるはまだ取りわけぬ苗代田なるべしここら行きかふ人におどろかぬもゆたかにみゆ　（六帖詠草）

【四九】飼鳥を好む人は非にして飼はるる鳥は奇特なるものなり巣ながらに蓄はれて籠の内をおのが處とし山野の廣寞なるを知らず子鳥の時は付親の音を大事と聞きうけんとす親鳥と

呼ばれては子鳥あまたつどへるを門弟子のおもひやすらんまづ音を立てんとしてはよく餌をしたためて後あるは暫し休らひ心をしづむるさまにて鳴き出づるが甚だつつしみて引色まで まさしくくり返しくり返し教ふる趣なりとぞ人は教ふるも學ぶも利欲といふものの病になりて其の正を得ざるも多きに小鳥の振舞感ぜざらんや　（閑田耕筆）

【五〇】友だち四五人ばかり一とせ嵐山の花見に行きし事ありぬ今日ぞさかりなるらむと覺ゆるほどにてかつ散るもあるに渡月橋のこなたを川添に水上の方へ行く風のさと吹きあるるに雪かとばかり亂るる花のとなせの瀧の岩なみにやがてまがひ行くなどいひしらずをかし　（年々隨筆）

む

【五一】此の庵のさま春は花見むとて櫻の林をまぢかくうゑなべ秋は月をすまさむたよりに南をまへにて軒ちかくやり水をながしこのもかのものへだてには草のまがきところどころなつかしくゆひわたして萩をみなへしやうのせんざいをもよきほどにうゑまぜたるなどすべていとよしあるすまひのさまにぞありける（鈴屋集）

【五二】田子の裳裾のひぢりこにそみつつ早苗とりはやす五月雨のはれまのいそぎを里つづきに何とやら唄ひつるるいと賑はしなやす川すずか川などの岸のをちこちにあすや晴るると

心の外の旅寢する人いかにわびしからん（藤簍冊子）

【五三】鶯のささば鳴きは平語ほけきやうと音になくは歌ならむ諸鳥皆しかり鶯のさへづりもよき鶯の音をきかせてそれに習ふなれば習ひて後に歌を詠むもさるべきことか（こぞのちり）

【五四】歌よまむずるやう書きたるものは古今の序そのはじめなりそれにもとづきて世々のうた人のあらはせる文あまたあなりいづれもみなよし是をみるにも歌はいまわが思ふ心をのぶることぞといふ心ばへをわすれずして見るべしみる文みな我がたすけとなるなりこの心ばへをわするればいろいろに心うつりて見る文かへりて我がうたのさまたげとなるなり萬の

事はじめのこころばへよりよくもあしくもなるなり（布留の中道）

【五五】なに事にてもあれかねて覺悟をさだめ給はんには道理の前にて定まりたる方にきはめ給はんや時のしあはせにて定まらぬかたに極め給はんや道理の前にて定まりたる方にきはめ給ふにてあるべし道理にて極めたる事はたとひちがひても後悔なかるべししあはせをたのみては覺悟も定まらぬものなりそれ故にかねてのあらまし違ひぬれば必ず臍を噬むぞかし（駿臺雜話）

【五六】靈驗は我が信の有る所にあり強ち何の神何の佛とさすべきにもあらず鰯の頭も信向せん人はその驗を得べし佛舍利なりとも信ぜざらん人にはしるし有るべからずもの我が心より靈なるはなし心のむかふ處自らその信あり鳴物もたたくときにはなりたたかざればならず我が一生餘念なく信向せんになどかその感應なからん（梅園叢書）

【五七】何によらず物の少きは長久のもとなり多く物をたくはへ持つは禍を招き身を勞するの媒なりされば財寶多くもちて生涯乏しくくらすは只財寶の多からんことを好む者なり衣食に薄くして財を持つ者只多くつめるを生涯のたのしみとして終に財寶のために身命を亡すなり欲少き人の目より見る時は夏の蟲の火を取りにおもむくに異ならず（雲萍雜志）

【五八】長月の初古郷に歸りぬ北堂の萱草も霜枯果てて今は跡

だになし何事も昔にかはりてはらからの鬢白く眉皺よりて只命ありてとのみ言うて詞はなきにこのかみの守袋をほどきて母の白髪拜めよ浦島の子が玉手箱汝が眉もやや老いたりと暫く泣く

手にとらば消えん涙ぞあつき秋の霜　（野ざらし紀行）

【五九】七夕の日は誰もとく起きて露とり初むるよりあるはことの葉をならべあるは古き歌を吟じて更に心を起しあるはまた糸竹をならし酒にたはぶれ舟に遊びてあすにならん事ををしむ　（ひとり言）

【六〇】子を持てるものはその恩愛にひかれてこそ苦勞はすれ

蜂の他の蟲をとりて我が子となす老のゆくへをかからんとにもあらず何を讓らむとてかくは骨折るや我に似よ似よとはいかに己が身を思ひあがれるにかあらむ花に狂ずるとは詩人の稱にして歌にはさしも詠まず蜜をこぼして世のためとするはよし只人目稀なる藥師堂に大きなる巣作りて掃除坊主をおびやかさんとすそれも針なくば人には憎まれじを　（鶉衣）

【六一】今年みちのくの方修行せんと乞食袋首にかけて小風呂敷せなかに負ひたれば影法師はさながら西行らしく見えて殊勝なるに心は雪と墨染の袖と思へば思へば人梅晴の空はづかしきに今更すがた替へんもむづかしく卯花月十六日といふ日久しく寢なれたる庵をうしろになして二三里も歩みし頃細杖

をつくづくと思ふ（おらが春）

まし

【六二】今日は雲まよひて富士も見えず原の宿わたりより雨ふらんとす富士川は明日こそ渡るべきを水嵩やまさりなむ夜をかけてだに蒲原の宿までいかで行かんとて夕つかたより立ちまよふ雲のあしと共にいそぎつつ行くに空晴れて思はざるに月さやかにいでにけり

夜舟こぐふじの川とに霧はれて高ねにいづる月を見るかな

夕の雲のいざなはざらましかばかかる所の月は見ざらましを心ありけりなどいひあへり（岡部日記）

【六三】明けくれ心へだてぬ友どちはかからぬをりだに何事につけてもまづ思ひ給へ出でらるるわざなるをましてかくめづらかなる朝ぼらけを心なき身のひとりのみ見侍らむことのいとあたらしく思ひ給ふればよし跡つけても人のとひ給はましかばこよなくをかしさもまさりぬべきものと思ひ給ふるにいかにとだにおとづれもし給はぬはいと思はずにうらめしくなむ（鈴屋集）

【六四】あしたの霧の絶間より木々の紅葉このもかのもに匂ひ分け行く山路はややうら枯れにたれど八千草の花猶ほ色をつくせり蟲の聲もそこはかとなく聞えてげに春見ましよりといひけむもうべなりけりやうやう登り行くほどみ山おろしに霧

晴れわたりて國のまほらもつばらに見わたさる（うけらが花）

【六五】神代もきかずとながめけん龍田の川の秋の末水もなくとつづけたりし大堰川の冬の初こそ聞きわたるにもいかばかりなる紅葉の淵ならましとゆかしけれ吉野川の春のくれも花のしがらみかけて思はぬにはあらぬものからかくばかり優なる紅葉の錦にはたち及ぶまじうなん唐の何がしの江にさらすとか聞けるも知らぬ境思ひよそへられて

花田色の帶かとまがふ河の面にゆはたと見えて散る紅葉

哉（泊沼文藻）

けん

【六六】木は桂五葉柳橘そばの木はしたなき心地すれども花の木ども散りはてておしなべたる緑になりたる中に時もわかず濃き紅葉のつやめきて思ひかけぬ青葉の中よりさし出でたるめづらし檀更にもいはずそのものともなけれどやどり木といふ名いとあはれなり榊臨時の祭御神樂のをりなどいとをかし世に木どもこそあれ神の御前の物といひはじめけんもとりわきをかし（枕草子）

【六七】左大臣は御年も若く才もことのほかに劣り給へるによりて右大臣御おぼえことの外におはしましたるに左大臣やすからずおぼしたる程にさるべきにやおはしけん右大臣の御爲によからぬ事出できて昌泰四年正月二十五日太宰權帥になし

奉りて流され給ふこの大臣子供數多おはせしに女君たちは壻どりし男君たちは皆ほどほどにつけて位どもおはせしをそれも皆方々に流され給ひて悲しきに幼なくおはしける男君女君たち慕ひ泣きておはしければちひさきはあへなんとおほやけもゆるさしめ給ひしかばともにゐて下り給ひしぞかし（大鏡）

【六八】初雁の翼につけつつここかしこより哀なる御消息のみ常は奉るを御覽ずるにつけても淺ましういみじき御涙の催しなり家隆二位は新古今の撰者にも召し加へられ大方歌の道につけてむつましく召し使ひし人なれば夜晝戀ひ聞ゆること限なしかの伊勢より須磨にまゐりけんもかくやと覺ゆるまで卷きかさねて書きつらねまゐらせたる和歌所の昔の面影かずか

ずに忘れがたうなど申してつらき命の今日まで侍ることの恨めしきよしなどえも言はず哀おほくて

ねざめして聞かぬを聞きてわびしきは荒磯浪のあかつきの聲

とあるを法皇もいみじと思して御袖いたくしぼらせ給ふ（增鏡）

【六九】篠原といふ所を見れば西東へ遙かに長き堤あり北には里人住家を占め南には池の面遠く見えわたる向ひの汀綠深き松の群立ち波の色もひとつになり南山の影をひたさねども青くして混濟たり洲崎所々に入り違ひて葦かつみなど生ひわたれる中に鴛鴨の打群れて飛びちがふ樣葦手を書けるやうなり都を立つ旅人此の宿にこそとまりけるが今は打ち過ぐる類の

み多くして家居もまばらになりゆくなど聞くこそ變り行く世の習ひ飛鳥の川の淵瀬には限らざりけめと覺ゆ

行く人もとまらぬ里となりしより荒れのみまさる野路の篠原（東關紀行）

【七〇】有明のころものへまかるとて夜をこめて立出づる空は月影くまなきにやうやう東の山際あかりてしらみゆくほど猶ほゆくすゑは霧渡りてはるかなる野邊にをりをりにうちてたく火の烟あらばと貫之のぬしのいひけむことの葉など思ひ出でられてゆくゆくきり出でつつとぶ火の光を野守が庵にはあやしと出でてや見るらむかくてまだ思ふさまならぬに火の消えぬるはをしきものなり（おもひぐさ）

【七一】園の中にいともなつかしき竹むらありもろこし人もいかでか一日も此のきみなかるべきとかいひけむやうにこれなむいと目につきておぼゆなるよぶかき雨のおとしづけきゆふべの風の聲はさらなり葉分の露に月をまち雪のしたをれを窓にきくなど園の草木の何はあれどこれにしくものはあらじかし（櫪園文集）

【七二】梅の花いとめでたし香はもとよりいはん方なし色も羅敷のをとめの月のもとに立てりけん昔おぼえて艶にやさし大かた世の人は櫻をのみめでたき物にするそれまことにめでたけれど桃海棠など及ばずとも傍ある心地するにこれは異木の冬籠りたる中に匂いとこよなくて氷のひまより打出づる波な

らで立ちならぶ花もなきは心とかりけりと思はるるがをかしきなり（年々隨筆）

【七三】櫻のほころび出でたるこそ花に心はなけれど人の心を動してえならぬ眺なれ是れ我が日の本にて四時の花の多き中にも第一の見ものなれば梅散りて後この頃のこと花は皆けおされぬされど日頃待たせ待たせてやうやう咲けるがあくまで見る程もなくとく散るは又うらめし

よしさらば散るまでも見じ山櫻花のさかりを面影にして

と古の人のよみけんも後の思出にせんとにや情ふかし（樂訓）

【七四】富士川の邊を行くに三つばかりなる捨子の哀げに泣くあり此の川の早瀬にかけて浮世の波をしのぐにたへず露ばかりの命まつ間と捨置きけん小萩がもとの秋の風今宵や散るらん明日やしをれんと袂よりくひものなげて通るに

猿を聞く人すて子に秋の風いかに

いかにぞや汝父ににくまれたるか母にうとまれたるか父は汝を惡むにあらじ母は汝をうとむにあらじ只是れ天にして汝が性のつたなきを泣け（野ざらし紀行）

【七五】雁はひとつひとつ山こえて跡なく見果つる舟の上にて古郷のかたに行きちがふ聲又つがひつがひならびゆく中にはしたなる鳥のまじはりたるいづくの網にか身をうしなひけんと妻の心ぞおもひやらるる（ひとり言）

き

【七六】北野のかみにならせ給ひていと怖しくかみなりひらめき清涼殿におちかかりぬと見えけるが本院大臣太刀をぬきさげて生きても我が次にこそものし給ひしか今日神となり給へりともこの世には我に所おき給ふべしいかでかさらではあるべきと睨みやりて宣ひけるに一度はしづまらせ給へりけりとぞ世の人の申し侍りしされどそれはかの大臣のいみじくおはするにはあらず王威の限なくおはしますによりて理非を示させ給へるなり（大鏡）

【七七】城崎に來て見ればやどりは昔ながらにてもと見し人はあらずたまたま君われを忘れずやと云ふを見ればむかしの人なり髪髭まだらなる翁のかなたよりも我をいかに淺ましとか見らんあるじと云ふもあげまきなりし人の今はおよずけて昔物がたりなどす（藤簍冊子）

【七八】いといたうさえあかしたるあした遣戸おしあけて見れば思ひしもしるく霜いと白くおきわたして池のおもては一つらに氷りて枯れ立てる蘆のとぢられたるがほのかに打ちそよぎたる風もいみじう寒けきに水がめの水はたいとかたく氷りつきたるひさごさし入るべくもあらずやうやう湯わかしもて來たるに手あらひなどとかくしつつ火おけに打向ひたるほど日影さしいでてとけゆく霜のけぶりもいとをかしう見ゆ（榧

園文集）

【七九】銅駝坊のあたりにしる人のもたる家ありいたづらなればとてすりもせずあれたるをさながらかりてすみけるころ人こぬほどは心やりに琴かきなでてうたひをるに月のよごろ更行く折々はかべのあれまよりたぬきはひいでて庭草のしげみに見えかくるるもあはれに覺えて獨ごちし

あな寂したぬきつづみうて琴ひかむわれ琴ひかばたぬきつづみうて（六帖詠草）

【八〇】寢ざめの枕にとしごろ分け見しもみぢの山々を思ふに小倉山初瀬の山は名にこそたてれたぐひあらじとまではえお

ほえず近江には藍谷てふ永源禪寺の廻りの楓のもみぢ見る人の面もてるばかりなるに猶ほ山ふかく分けいれば名もしらぬ木どものいろいろに染めしも織り交へたる錦とぞ見えし（閑田文草）

【八一】おのれ幼より蒲柳の資にて秋冷を畏るる故に月を賞するは文月にますかげなしと思へりされば或年の秋

名にしおふ葉月長月の月はあれど月はふづきの中ぞらの月

と戯れしが思ふに東坡の前赤壁賦も七月既望なり又この頃一友人の示せる楊萬里が詩に

月色如霜不粟肌　月光如水不沾衣

一年沒」賽」中元節」　政是初涼未」冷時

人情はひとしきものなりとこれを聞きて感じぬさるに或人いふ七月は猶ほ晝の暑きからに月を見ても照日の思ひあり吳牛の喘ぎも吾にひとしきかといへりこれは又暑さを憎むの甚しきによるべし　（閑田耕筆）

【八二】春秋のあはれをいひ月花などを詠めし歌もただ其のままに寫しとりてさながら見るやうにあるはなにのをかしきふしもなけれどかの詞つづき巧みによくいひかなへたると見ゆるよりは感ふかうしてすてがたく覺え侍る　（駿臺雜話）

【八三】人の世にあること舟に乘合ひて泊りし折を思ひいづればいか程の不自由たりとも忍ぶに堪へざることなかるべしとひ疊一枚の家に住むとも乘合舟には優るべし夜泊の切なき膝を折りて足を縮め人の足を枕として押合ひ睡らんとすればゆすり起され少しまどろむとおもへば鼾に目さめて起臥とも心に任せざるはたとひ一夜といへども生涯もなほひとしかるべし　（雲萍雜志）

【八四】清水ながるるの柳は蘆野の里にありて田の畔に殘る此所の郡守戸部某の此の柳見せばやなど折々にのたまひ聞え給ふをいづくの程にやと思ひしを今日此の柳のかげにこそ立ちより侍れ

田一枚植ゑて立去る柳かな　（奥の細道）

【八五】今日はこの事かの事にさはる事あり明日は飛鳥山の花見ん花見んと心に過ぐる日數もやや彌生の廿日あまり尋ねし花は名殘なくちりて染めかはる若葉の其の色としもなきを春を惜む遊人は我のみにもあらず爰に酒飲みかしこに歌ひて此の夕暮に歸るさわするるも中々心ふかき方におもひなさる

ちり殘る茶屋はまだあり花のもと（鶉衣）

けり

【八六】石清水の社にて大般若供養說法いみじかりける刻限に晴れたる空に黑雲一むら俄に見えてたなびくかの雲の中より白き羽にてはぎたる鏑矢の大きなる西をさして飛び出でて鳴る音夥しかりければ彼處には大風の吹き來るとつはものの耳には聞えて浪荒くたち海の上あさましくなりて皆沈みにけるとぞなほ吾が國に神のおはします事あらたに侍りけるにこそ（增鏡）

【八七】おほよそ草木の花の天地のなしのままに咲出づるにくさぐさの色ありといへど白たへなると紅なるにまされるしもあらざりけりそが中にもけぢめありて百しほ千入に色こきはこちたくうたてありてかしこきはのきぬの色めにさへかよへばにやたはぶれにくしあら染の淺らかなるは下が下のみじかき袖おぼえて品おくるるかたになむおもはるる（うけらが花）

【八八】よろづの物ことわりの外におもむきあり其のおもむき

はそれ知れらむ人に見せずては何のかひかはあるべきこの大津繪は昔よりのならひにて童の筆すさびのやうにはかなく書きなしたる中におほかたの繪師のまねびがたきおもむきあるこれはた見る人によりて其のおもむきは知らるべきなり色をも香をも知る人ぞ知ると昔の人のよみたるはげにさる事にむありける（櫪園文集）

【八九】里のかたにゆけばむねむねしうたてつづけたる家ゐの中に岡のなにがしが河にのぞみてつくれるいでゐの亭こそいと興ありけれ名を柳陰といふもしるくみなぎしにいと大なる柳二三株たてりかなたこなた見やるに山水はるかにはれて西は松尾南は生駒につづきて見ゆるは大和路の山々なるべし河

のをちかたにおりたつは網引釣たれなどすめり橋行きかふ人の木の間より見ゆるもから繪めきてをかし（六帖詠草）

【九〇】卯月に閏のありける年あかぎの杜の木蔭すずしかるべしとて二人三人物しつそこはかとなく茂りあひたる遠近のけしきいとをかしうて久しく立てるに時鳥のわが蔭しめたる槻の木にしも二つ三つとまりゐていづれまされりと音をつくすうるさしといへど行くての聲はなほをかしきをここ去らず鳴くはふくつけさにくさいはん方なしおのれ

うるさしよ聞くもうづきの今年またあまりあるまで鳴く

郭公

と詠みつ事ざましなる歌なり斯くいひながらも年ごとの卯月

のはじめ今は鳴くべきにやと心もとなうて待たるるぞ心よわきや日ぐらしにて昨日小石川にてをととひなど人づての聞ゆればあやしうすずろなる心地す（年々隨筆）

【九一】或年長けて子をもちし人珍しさのあまりに屏風引きまはし夜晝となく抱かせ置きけるに折しも夏の事にて皆々暑さに堪へかね代る代るして抱きける三十日あまりして黄疸の如く病みて死にけり大人の堪へがたきを見て幼子はさぞと思ふ心もなくうつくしむの害ふなることを知らぬこそ口惜しけれかかる事またあるべきにもあらねどこれに似たることは多しとぞ（たはれぐさ）

【九二】西上人の草の庵の跡は奥の院より右の方二丁ばかり分け入る程柴人の通ふ道のみはつかにありてさかしき谷を隔てたるいと尊し彼のとくとくの清水は昔に變らずと見えて今もとくとくと雫落ちける

露とくとく試みに浮世すすがばや
若し是れ扶桑に伯夷あらば必ず口を嗽がんもし許由に告げば耳を洗はん（野ざらし紀行）

【九三】おのれらは俗塵に埋れて世渡る境涯ながら鶴龜にたぐひてのの祝ひづくしも厄拂の口上めきてそらぞらしく思ふからにから風の吹けば飛ぶ屑家は屑家のあるべきやうに門松立てず煤掃かず雪の山路の曲りなりに今年の春もあなた任せにな

ん迎へける（おらが春）

つぬ

【九四】九月ばかり夜一夜降りあかしたる雨の今朝はやみて朝日の花やかにさしたるに前栽の菊の露こぼるばかりぬれかかりたるもいとをかし透垣羅文薄などの上にかいたる蜘蛛のいのこぼれ残りて所々に糸も絶えざまに雨のかかりたるが白き玉を貫きたるやうなるこそいみじうあはれにをかしけれ少し日たけぬれば萩などのいと重げなりつるに露の落つるに枝のうち動きて人の手ふれぬにふとかみざまへあがりたるいみじういとをかしといひたること人の心地にはつゆをかしからじと思ふこそ又をかしけれ（枕草子）

【九五】かねては猛く見えし人々もまことのきはになりぬればいと心あわただしく色を失ひたるさまどもたのもしげなし六月二十日あまりにやいくばくの戰だになくて遂に味方の軍破れぬ荒磯に高潮などのさし來るやうにて泰時と時房と亂れ入りぬれば言はん方なくあきれて上下ただ物にぞあたりまどふ（増鏡）

【九六】元弘二年の春にもなりぬ新しき御代の年の始めには思ひなしさへ花やかなり上も若う清らにおはしませばよろづめでたく百敷の内何事も變らずさるべき公事のをりをりさらでも院内同じ陣の中なれば一つに立ちこみたる馬車ひまなく賑しけれど見し世の人は一人もまじろはず參りまかづる顔のみ

ぞかはれる（増鏡）

【九七】行き暮れぬればむさ寺といふ山寺のあたりにとまりぬ
まばらなるとこの秋風夜更くるままに身にしみて都にはいつ
しか引きかへたる心地す枕に近き鐘の聲曉の空におとづれて
彼の遺愛寺のほとりの草の庵の寐覺もかくやありけんと哀な
り行末遠き旅の空思ひつづけられていたう物悲し
都出でて幾日もあらぬ今宵だにかたしきわびぬとこのあ
き風（東關紀行）

【九八】あらあらしう吹きしをりし嵐もなごりなくのどまりて
前栽の梢もいとどさびしく木のもとに朽殘る落葉も朝霜なが

らの氷にうづもれ空さへ雪氣にうちくもりゐる夕ぐれややち
りくる花にぞ春のとなりの近ければとすこしさうざうしさも
なぐさみてながめいだせるにねぐらに歸る夕がらすの三つ四
つ二つなきわたるもいと寒げに見ゆ（おもひぐさ）

【九九】蟬なく木かげのやどりに汗をぬぐひ岩間の清水を結び
てあかぬ人の行きつかるる樣なるに風さと吹き來ぬる跡より
黑き雲の追ひしきて降りくる村雨は瓶にたたへし水をくつが
へすが如くに御格子おろせ簾よなど立ちさうどきつつ見たま
へれば大庭のしらまなごは忽ち淺川の瀨に流れあひて殿守の
ともの宮つこらここかしこの御垣のくまぐまに這ひかくるる
などいとめざましな（藤簀册子）

【一〇〇】いでや白雪の舊年よりしもはねならはしつつかげろふの春立ちそむるあした日影うららうらとうち霞めるに軒近き篁にねぐらしめつる鶯のまだ片なりなるうひごゑにほひ出せるより笠にぬふてふ花のかをり滿てる枝に來ゐつつほこりかにさへづるはめでたき物から雲にたぐへし櫻も散り過ぎて青葉しげき木の間を立ちくく聲のむくつけきには待たるる物はといひしに行きたがへてぞおぼゆるかし（うけらが花）

【一〇一】何ごとをなすともなくてことしも長月のけふになりぬとしどしにかけて色なきことばのつゆはむかふ菊にもおもなけれど又こん秋にあはんもいとたのまれぬ身なればおもひよるふしをかりそめにかいつけて見ばやとてあまたよみける

中に

長月のけふのためとやきのふよりつくろひたてしきくのきせ綿（六帖詠草）

【一〇二】春も老い行くころ蛙の時得がほにすだくもをかしほととぎすの初音いかにと思ふころ村雨のはらはらと降り出でたるも五月雨の幾日も降りくらして書の卷々くりかへしつつ居たれば何となく世の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする（花月草紙）

【一〇三】茶の湯の益はいとふつつかにあらあらしき人もこれを翫べば起ち居おとなしく物を取りあつかふにも見ざまよく

なりぬ又主客の禮節たとへば夜會にあるじ手燭を携へ出でて客を迎へ燭を石上などに置きて禮して退く客其の燭をとりて庭の木立など見るふりしてわざとなく主の歸る道を照らすなどやうの心づかひ禮の實にかなひて此の意をめぐらさば陰德なるべしさるに俗流の弊風得がたきを求め金錢を費しあるはまた其の產業ならぬ人も黠智あればこれをもて利を射るにも及び心ざまよからずなりゆくもまま見ゆ富豪の家に茶を翫ぶことを禁ずるがあるも子孫過奢に及ばんことを懼るるなり

（閑田耕筆）

【一〇四】雨風に花はあとなくなりはてて空しき枝をのみ形見と見ぬれどなほ春の色は空に殘りて面影去らぬも情ふかし藤は又春にひとり立ちおくれ夏に咲きかかりて傍にならぶ花なければにやひとへに興あるさまに見えて春にわかれし物思もすこし忘らるる心地ぞし侍る（樂訓）

【一〇五】たとへばものをいふにも常にいひつけたるやうにいへばよきを我しりがほに漢語などにて舌短にいひつれば人ききとらぬ程に亦いひなほしなんどしていとむづかし事をなすにも今までなし來るやうにすればよきを我かしこげに理窟をもて手廻しにしつれば事つかふる程に又でなほしなんどして跡へもどる事おほしかやうの事は物馴れぬ人のある事なり

（駿臺雜話）

【一〇六】 心許なき日かず重なるままに白川の關にかかりて旅心定りぬいかで都へと便求めしもことわりなり中にも此の關は三關の一にして風騷の人心をとどむ秋風を耳に殘し紅葉を俤にして青葉の梢なほあはれなり卯の花の白妙に茨の花の咲きそひて雪にもこゆる心地ぞする古人冠を正し衣裝を改めし事など清輔の筆にもとどめおかれしとぞ

卯の花をかざしに關の晴着かな　曾良（奥の細道）

たり り

【一〇七】 三月三日うららとのどかに照りたる桃の花の今咲きはじむる柳などいとをかしきこそ更なれそれもまだまゆにこもりたるこそをかしけれ廣ごりたるはにくし花も散りたる後はうたてぞ見ゆる（枕草子）

【一〇八】 萱津の東宿の前を過ぐればそこらの人集りて里も響くばかりにののしりあへり今日は市の日になん當りたるとぞいふなる往還のたぐひ手毎に空しからぬ家づとも彼の見てのみや人に語らんと詠める花のかたみにはやう變りて覺ゆ

はなならぬ色香も知らぬ市人のいたづらならで歸るいへづと（東關紀行）

【一〇九】 花はさくら櫻は山櫻の葉あかくてりてほそきがまばらにまじりて花しげく咲きたるは又たぐふべき物もなくうき世のものとも思はれず葉青くて花のまばらなるはこよなくお

くれたり大かた山ざくらといふ中にもしなじなのありてこまかに見れば一木ごとにいささかかはれるところありてまたく同じきはなきやうなり又今の世に桐がやつ八重一重などいふもやうかはりていとめでたし（玉かつま）

【一一〇】ここち例ならずなやみ居てはかなきくだものなどをさへいとものうくしたるをりにもいささかおこたりざまなるにはまづ思ひ出づるぞかし常にすける人のきよく遠ざけて日數ふるはとぶらひきたる人などにもしかじかなむさぶらふなどもいふかし（おもひぐさ）

【一一一】昔父の世にいますがりし時は遊の道にふかう心よせ

たまへりしままに吹きもの彈きもの何くれの器ども家にあまたつたへたるをとしごろたびたびの火にあひていまはおほく失せもてゆきてただあづま一つなむこれをのみ昔しのぶのくさはひには思ひたる（琴後集）

【一一二】おもしろき海山のたたずまひに思ふ心をのばべ其のさまを書きもしるし又其の國々にて名にきこえたる人々の歌やまとのもからのもあるはふみあるは畫など乞ひ出でて一つにものしたる又なき心やりぐさにて後にとりいでて見るにもいとをかしくなむおぼゆるをかならず旅路を行きめぐらむみやびをは集めものすべき事になむある（櫃園文集）

【一一三】 軒近くみづえさし茂りに茂りゆく木のいと高くはあらぬよし見るに心うき立つものぞかし常磐木は遠きよしふとやかなる松五もとばかり高やかに立ちなみたるを仰ぎ見やりたるいとよし月のくまとなるがにくくおぼゆるもなかなかにをかし軒に立てるは桐よしふくつけきまでひろごりて日影をさふるよ雨にも音聞きたるいとよし （天朝墨談）

【一一四】 玉のうてなも膝を入るるに過ぎず錦の衣も風を防ぐの外用なし鳥の魚の數あるも腹にみつれば土の如しかのやんごとなく富み榮えたるきはは味をつくしてくらへど物きはまりて望足らず織物のめでたきを重ねてもはだへ常に寒きやうなりみつばよつばに造りみがきても住みなれ目なれてきよら

なりとも知らず （とはずがたり）

【一一五】 ありとある木々のみづえさしつつちひさく玉まきたる葉のえんにうつくしう何の木くれの木といふけぢめもなうひとつみどりにうちにほひたるなんいとをかしき （沽哉集）

【一一六】 いとおくまりたる山寺のをさをさ人も詣でこざりげなるさかひは門入るよりあさましく心すみて世の中に立歸らんことのいとはしうさへぞなりぬる南より西へをれて長う續きたる廊にものしてゆくにひんがしの庭にあまたうゑられたる櫻のいとよう咲出でたるが曉露の名殘にや花おもげに梢うちたれなどしたる同じ櫻も處によりてこよなう咲きばえする

ものかな　（沽哉集）

【一一七】朝夕とうつりゆく一年のほどに折にふれ時にしたがひてあはれにもをかしうも覺ゆる中に初春の景色こそいさましう心ゆくものはあれ何事か昨日にかはれると打眺めやる初空いつの間にか霞みわたり明けゆく雞が音まづいさましう門毎に松切りたて竹さし添へて春風の音づれ待ちつけたるいとうれし　（年々隨筆）

【一一八】たはれたるものの言葉も賢き人は擇ぶといへるを便りとし見し聞きし思ひし事どもをそぞろに書きつづけて世の謗いかがと恐しけれどわが後なる人の庭の訓とも思へかしと

焚く火に燒きもやらず殘し侍るなり　（たはれぐさ）

【一一九】笠着て馬に乘つたる坊主はいづれの境より出で何をむさぼりありくにやこの主のいへるこれは予が旅のすがたを寫せりとかやさればこそ三界流浪のもも尻落ちてあやまちすることなかれ

馬ほくほく我を繪に見る夏野哉　（芭蕉翁文集）

【一二〇】促織鈴蟲くつわむしはその音の似たるを以て名によべる松蟲のその木にもよらでいかでかく名を付けたるならん毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて松を枯らし人にうとまる一在所に二人の八兵衛ありてひとりは後生をねがひひとり

は殺生を事とすこれ松蟲の類なるべし（鶉衣）

てん なん たらん

【一二二】正和も二とせになりぬ今年御本意遂げなんと思さる九月の暮つかた賀茂に忍びて御籠の程をかしきさまの事ども侍りけり近く候ふ女房どももうちしほたれつつ晦がたの空のけしきいとものの哀なるに御製

ながつきや木の葉もいまだつれなきにしぐれぬ袖の色や變らん

また

わが身こそあらずなるとも秋の暮をしむ心はいつもかはらじ

人々もさとしぐれわたり袖の上今日をかぎりの秋の名殘よりも忍びがたし（增鏡）

【一二三】花は大かた盛すぎて今は散り殘りたる梢どもぞむらぎえたる雪の面影して所々に見えたるそもそも此の山の花は春立てる日より六十五日に當るころほひなんいづれの年も盛なると世にはいふめれど又わが國人の來て見つるどもに問ひしにはかのあたりの盛の程を見てここにものすればよき程ぞとこれもかれもいひしままに其の程うかがひつけていで立ちしもしるく道すがら問ひつつ來しにもよき程ならんと多くはいひつる中にまだしからんとこそいひし人もありしかかく盛過ぎたらんとはかけても思ひよらざりしぞかし（菅笠日記）

【一二三】時はいつにもあれ宵あかつきをもいはじ垣根の荻の葉のさわぎ草深き蟲の音のみやは朧夜の花の木がくれ時鳥一二聲の音づれ片山里の門涼みに螢三つ四つ飛びかふには命も延べなん心地もせらるべき　（藤簍冊子）

【一二四】あづまの人は夷なり歌いかで詠まむと云ふよ相模の國小よろぎの浦人のやさしく生ひたちて萬に志深く思ひ渡り如何で都に上りて歌の道學びてむ高き御あたりによりて習ひ傳へたらむには花の蔭の山がつよと人の云ふばかりはとて西をさす心頻りなり鶯は田舍の谷の巣なうともだみたる聲は鳴かぬと聞くをとて親に暇乞ふ　（春雨物語）

【一二五】秋こそ殊にといへるもうべなるかな籬のもとにたたずめる小鹿松に木づたふましらの聲もひとりある人をなぐさむるに似てあはれなるに茜さす日も入りはてそまびとの斧の響絶えて端山のかひより月さしのぼればそがひの嶺よりおつる瀧つ瀬はこがねの色の絲引きはへたらむ如く岩に碎くる水は白玉をこきちらすとぞ疑はる　（うけらが花）

【一二六】今の世のくせにて名をこのむ人のおほかるこそ心得ねもとより深きこうつみたることもなき業をみづからかへりみもせでみだりに我はがほつくりて人にもてらひ世にもほこるめるはいかなる心ならむたとへしれ人をばあざむくとも事の心をよく明らめたらむ人の見てあざけりわらはむことはは

づかしきわざには侍らずや其の名をこのむとおもへるはかへりて恥をもとむるにぞ侍りけるなかなかにむなしき名の消せざらむよりは木草と共にくちはてむこそ人はめやすう侍るべけれ（琴後集）

【一二七】もののあはれは秋ぞまされると昔の人のいひしはさる事ぞかしこの山水のかたよ木々のもみぢもまだ色うすき頃なればここはととりわきてほむべき所なけれどそこはかとなくきりわたれるがいひしらぬけしきにて柳櫻をこきまぜたらむ春のながめよりもけにあはれにいみじくあくよなうおぼゆとかや（松屋文集）

【一二八】思ふどちまとゐして埋火かきおこし酒あたためつつ物語するにいつしかさゆる夜のけはひも忘られて窓の戸おしあくればよひのうき雲なごりなく晴れて雪少しふりたる庭に月のさやかに照りたるがいはむかたなくおもしろきをかくてのみやはあるべき徒らに寝てあかすらむあたりをもおどろかしてむとやがて打ちつれつつあくがれ出づ（檞園文集）

【一二九】くちなしはめでたけれど葉のさまうるはしうてなつかしげなしぬるでは品くだりにたり柿の葉の霜より後まで散り残りたるがうるしもてぬりたらむやうに照り光りて只二葉ばかり見ゆるいとめづらかなり黄なるは銀杏（年々隨筆）

【一三〇】暑さに堪へかぬる頃雲のみなぎり出づる勢ありて風ひとしきり吹きおちたるに柳蓮葉なんどの葉裏白く見せたるも涼しやがて大きやかなる雨の間遠におちたるが後にはしきりに降りきて物の音もきこえず土のにほひ來たるもいと心地よし軒端は玉のすだれ懸けたらんやうに玉水の絶間なく落ちたるに庭は一つみづうみとなりてあるは瀧おとしまたは水はしらせたるに人々しばし物いはでうちまもり居たるもをかし

（花月草紙）

【一三一】諺にも陰陽師の門に蓬たえずとてあまりつよく物を忌めば草とる日とてもなくなり侍るよき日なりとて惡事をなしなばあしかるべし惡日なりとも善き事なしなばよかるべし

目のあたり試むべき事には天火地火の日なりとも五穀を植ゑてよく培ひ耘りたらんにはよき日を擇みて植ゑ培はず耘らざるよりは遙によかるべしもし又麥の春の霜にいたみ稻の秋の風にあれんは吉日に植ゑたるも惡日に植ゑたるもおなじく損はるべしもし又洪水火難等に逢はんには吉日に建てたる家も惡日に建てたる家もおなじく波にゆられ又一片の燼となるべし

（梅園叢書）

【一三二】木曾の山中など深山幽谷にて岩茸を取るには籮といふものを造りて綱をつけて夫はそれに入りてその妻樹々の枝より下げてつり却し引上げなどして谷間の岩茸を取りぬるとぞ下は幾丈とも限り知れざるところなるよし見し人ものがた

れりもし過ちて綱のきれて落ちたらんには命なかるべし世わたる業さまざまなる中にかかるすぎはひする輩もあるものを家にありてその日を樂みに過しつる身はいとありがたきことにあらずや（雲萍雜志）

【一三三】つつじ藤山吹其の外名をもてる物古歌にすがり古き詞にもたれて只おもしろしとのみ大かた上にてながむる人おほし底よりながむる人は我が心われに道しるべしてまことのおもしろき所に入るべし其の感より出でたらん發句はその意味ことばに述ぶる事かたくや侍らん（ひとり言）

【一三四】用をかきても寐よとにはあらねど三四五月の短夜に

枕加減のよき頃は朝寐こそ又をかしけれ必ず目のさめぬにもあらねどうつらうつらと夢見夢見ず花に朝日のにほひたるも松に有明の殘りたらんもかの閨ながら思へるは起きて見るにも勝るべけれ（鶉衣）

てけり　てき　たりけり　たりき
りけり　りき　にけり　にき　にて

【一三五】秋の野のおしなべたるをかしさは薄にこそあれ穗さきの蘇枋にいと濃きが朝霧にぬれてうち靡きたるはさばかりの物やはある秋のはてぞいと見所なきいろいろに亂れ咲きたりし花のかたもなく散りたる後冬の末まで頭いと白くおほどれたるをも知らで昔思出で顏になびきてかひろぎ立てる人に

こそいみじう似ためれよそふる事ありてそれをしもこそ哀とも思ふべけれ（枕草子）

【一三六】かの筑紫にて九月十日菊の花を御覽じけるついでにまだ京におはしましし時九月の今宵内裏にて菊の宴ありしにこの大臣の作らせ給へりける詩を帝かしこく感じたまひて御衣たまはり給へりしを筑紫に持て下らしめ給へりければ御覽ずるにいとどそのをり思しめし出でて作らせ給ひける

去年今夜侍二清涼一　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在レ此　捧持毎日拜二餘香一

この詩いとかしこく人々感じ申されき（大鏡）

【一三七】富士の山はひつじさるの空に見ゆ是ぞおのがながむる方なるに故郷人はこなたをこそと思ふもこたびはうれしをちつとし東に來にけるほどに

東路にありと聞きつる富士のねを夕日の空にかへりみるかな

とながめてかぎりなく遠くも來にけり、とわびつるにはかはれり（岡部日記）

【一三八】いと末の世と成りにては歌の心言葉も常の心言葉しも異なる物と成りて歌とし云へば然かるべき心を曲げ言葉を求め取り古りぬる跡を追ひて我が心を心ともせず詠むなりけり其れはた塵のすわれる鏡の影の曇らぬ無く芥に交れる花の

蕋の穢しからぬ有らざるがごとさしも曇り穢れにし後の人の心もてもとめ撰びて云ひ續けしが汚からじやは（歌意考）

【一三九】むかしは皇國のまなびとてことにすることはなくてただからまなびをのみしけるほどに世々をふるままにいにしへの事はやうやうにうとくのみなりゆきから國の事はやうやうにしたしくなりもてきつつひにそのこころはもはらからざまにうつりはてて上つ代のことは物の意はさらにもいはず言葉だに聞きしらぬ異國のさへづりを聞くがごとものうとくぞなりにける（玉かつま）

【一四〇】八日きのふ初瀬の後雨ふらでよもの山のはもやうやうあかりゆきつつ多武のみねのあたりにては名殘もなく晴れたりしを今日も亦いとよき日にて吉野も近づきぬれば今朝はいとど足かろく皆人の心ゆく道なればにや程もなく上市に出でぬこのあひだは一里とこそいひしかいと近くて半里にだにも足らじとぞ覺ゆる（菅笠日記）

【一四一】神無月の雲のけしきみやこも田舍もおなじさまにはるる日なきはこれや時じく雨のよしなるを其の頃すぎにてはみぞれとふり雪あられとこりて枕をおどろかし窓のもとに夜更くるまで書よむ人の心すさびをもよほすなんいとあはれとおぼゆる（藤簍冊子）

【一四二】 残る日かずもはや二日三日となりぬるを玉づさかけてくる聲だにせず楓はなほ染めがてなるは心おそき秋にもありけるかなされど柿の葉のいやしげなるものからうら山吹の袖おぼゆるまで染めなしたるが文机のもとに散りくるにおどろきて見いだせば晴れにたる空いつしかかたへくもりてしぐれさと降りきぬうらがれたる荻の葉もしづ心なく萩の下葉の色附きたるがほろほろと池水に散りてながるるもをかし（うけらが花）

【一四三】 むかし人の茶の湯にすけるは事そぎ物おろそかなるをこのめりしに今の世には得がたき品をもとめあたひなきくさはひを爭ふ事とぞなりにたるさるはもとしづけき心をやしなひ世の塵をのがるべきわざなるを今は時にきそひ人にてらひてよろづほこらしげなるは人の心のうつろひ行く事すべて世のならはしとはいへどうたてあるわざとぞなりにたる（琴後集）

【一四四】 湊河なる楠正成朝臣の墓石の文字を摺りとりたるをつたへ受けてもてる人のあるをりをり見かく天地をつらぬくかの朝臣の忠ごころは年月ふるままに光りそはりてやんごとなき物なるより心ある心なきわかちなく此の摺りもじを貴みまつるならはしとなりにたるさはいへど人々たくはへもたる大和心の芽かつがつはり出づる春や來にけんと年ごろしかめられし眉根少しはうちのばされて

年々に御墓の文字をすりふやし寫しひろむる君の眞心

（志濃夫廼舍歌集）

【一四五】　こよひは鬼のすだく夜なりとて家々に鰯の頭柊さし渡す我が大君の國のならはしいづくか鬼のすみかなるべき昔の聖は衣冠して殊に此の夜をつつしみ給ふとこそ世を遁れたる翁の炬燵に足さしわたし年を惜むの外に何の辨へたる事もなきこそ中々安かりけれ今は捨てたる世に似げなきわざながら家に老いたる男のかがめる腰にしほたれ袴かけてけしきばかり豆うちちらし聲わなきて鬼やらひたるも昔覺えてをかし年の數を豆に拾ひて厄拂ふ者に取らするものとて己がさまざまする事なるに昔は膝のあたりかい探りても其の數は得たりしが今は八疊の一間にもあまるばかりになりにたるぞわびしきや（鶉衣）

ずざり

【一四六】　六波羅の北なる檜皮屋にはもとより兩院春宮おはしませば南の板屋のいとあやしきに御しつらひなどしておはしまさするもいとほしうかたじけなし間近き程によろづ聞しめし御覽じふることごとにつけてもいかでか御心動かぬやうはあらんロ惜しう思しみだるならはぬ御宿に時雨の音さへはしたなくて

まだなれぬ板屋の軒のむら時雨おとを聞くにも濡るる袖

かな（增鏡）

【一四七】 齢は百歳の半ばに近づきて鬢の霜漸く冷しと雖も爲す事なくして徒に明し暮すのみにあらずさして何處に住みはつべしとも思ひ定めぬ有様なれば彼の白樂天の身は浮雲に似たり首は霜に似たりと書き給へるあはれに思ひ合せらる（東關紀行）

【一四八】 人の生れつきさまざまあるものなり物の義理事の利害などすべて萬の事を心にはよく思ひわきまへながら口にはえいはぬ人もありまた口にはよくいへどもしか行ふ事はえせぬ人もあり又口には得いはねどもよく行ふ人もあり又口にはよくいへども文にはえかきいでぬ人あり又口にえいはねども文にはよく書きいづる人もあるなり（玉かつま）

【一四九】 睦月立ちなほ吹く風は寒きにも日の影うららと山の南おもてに霞たな引きそめて去年よりふふみし梅のゑみをひらき鶯の初音ささやかならず軒におとづれて芽はる柳の枝は空に動くけしきなん見ゆさるは人の心もゆたけく高き卑しきゐやゐやしく喜びをのべつつ疎きもいきかひしてことなきを祝ふたのしさよ（藤簍冊子）

【一五〇】 池の藤なみ夏かけてにほへる頃ほととぎすのそれかあらぬかとたどらるる一聲より花橘のゆくりなく香ににほへる曙あり明の月のさやかなるみ空にさだかに名のりて過ぎ行くは更なり小雨そぼふるゆふべ物思ひにいを寝ずして更け過ぐる夜半にをち返り鳴くを誰やし人かあはれとおもはざらむ

然はあれど山かたつけるわたりにはこちたきまで飛びかひつつ梢にしもおりゐて高やかに鳴きとよめるなどは今一聲のといふべくもあらずうれたきや　（うけらが花）

【一五一】まめしきは遠ざかりよこしまは近づく近づく者日々に親しみ遠き者日々に疎しうとときがきこえあげんとすること必ず近きをもて梯とすれば近きに權あり遠きに威なし權あれば事を生じ威なければ防ぎがたしつひに家國のやぶれとなりもてゆくなりこれ君またく暗きにあらねど夜の燈の如く近きを照して遠きに及ばざるが故なり　（とはずがたり）

【一五二】あなあはれ世はあぢきなきものなりかりそめのやうなりしこの品川の旅住居もはや五年なり庭の木草は皆手づから植ゑつるものぞかし常に目なれて心にもつかねどいつしか立ちのび繁り合ひいたう物ふりたる山里となりぬ今はめかるべきにつけてもまづうき世の中の思ひなりされてただあなあはれとぞいはるるや　（年々隨筆）

【一五三】櫻は風に散りかふも雨にぬるるも遠山に見るも軒端にむかふも明ぼのも夕暮も露のひるまも目かるる時しなきをことに我が國ぶりの姿にて枝もすなほに花のかたちもゆたけく匂さへもこちたからぬもあやしきまでにこそ覺ゆるものなれ然るをいづこにもありと言ふはさらなり曙夕暮などとおもしろからんやうに言葉添ふるはいまだ深くそめし心にはあら

ざりけりすべて言葉もて言ひ盡さんと思ふはいとあさき心かな（花月草紙）

【一五四】世の人まどしくしては憂ひ苦み富貴をうらやみて樂なく富貴にしてはおごり怠りて欲をほしいままにし財をつひやして樂を求むれど欲にやぶられてかへりて自ら苦み人を苦ましむすべて富貴も貧賤も其の願外にありて内に道を得ざれば苦のみにて樂なし（樂訓）

【一五五】昔よりもろこしやまと共に世の英雄豪傑多くは己が武勇智謀に誇りて天の未だ定まらざるを見て天道は人力をもて自由になるものと思ひつつ猛威を逞しうし詐力を恣にして一旦は志を得るに似たりといへども程なく天定まりぬれば忽に天罰にあたりて身失せ家滅ぶる事古今歴々としてそのためしすくなからずされば人として天に勝つは禍のもとと知るべし（駿臺雑話）

【一五六】二十日あまりの月かすかに見えて山の根際いとくらきに馬上に鞭をたれて數里いまだ雞鳴ならず杜牧が早行の殘夢小夜の中山に至りて忽ち驚く

馬に寐て殘夢月遠し茶のけむり（野ざらし紀行）

【一五七】新しく作りたる句はやがてふるくなるべし只とこしなへに古くもならず又あたらしくもならぬをこそ能句とはい

ひ侍るべくや作意にのみかかはりていふ句とまことを深く案じ入りて一句のすがた詞にかかはらぬとの差別なるべし（ひとり言）

【一五八】煤拂は人の顔みな埃におほれて誰とも更に見えわかねば聲をすがたに呼びかはすもをかし又置所わすれて日頃たづぬれども見えざりし物の出でなんどしたるは我が物ながら拾ひたる心地ぞする（ひとり言）

じまじ

【一五九】鶯は文などにもめでたき物につくり聲より始めてさまかたちもさばかりあてに美しき程よりは九重の内に鳴かぬぞいとわろき人のさなんあるといひしをさしもあらじと思ひしに十年ばかり侍ひて聞きしにまことに更に音もせざりきさるは竹も近く紅梅もいとよく通ひぬべきたよりなりかしまかでて聞けばあやしき家の見どころもなき梅などには花やかにぞ鳴く夜なかぬもいぎたなき心地すれども今はいかがせん（枕草子）

【一六〇】はぎの花女郎花くररりんだう眞葛の這ひ歩きたらんに夕をまたで鳴きさかる蟲のこゑごゑ名もしらぬ小草の花花露霜にもみづる淺茅原木枯にちりかかる何くれの廣葉のからからと音してそことはてなく走り行くも山の紅葉のから錦なるをも悲しとのみは誰も眺むまじきをや木の葉の落つるは

ひ侍るべくや作意にのみかかはりていふ句とまことを深く案じ入りて一句のすがた詞にかかはらぬとの差別なるべし（ひとり言）

【一五八】煤拂は人の顔みな埃におほれて誰とも更に見えわかねば聲をすがたに呼びかはすもをかし又置所わすれて日頃たづぬれども見えざりし物の出でなんどしたるは我が物ながら拾ひたる心地ぞする（ひとり言）

じ まじ

【一五九】鶯は文などにもめでたき物につくり聲より始めてさまかたちもさばかりあてに美しき程よりは九重の内に鳴かぬぞいとわろき人のさなんあるといひしをさしもあらじと思ひしに十年ばかり侍ひて聞きしにまことに更に音もせざりきさるは竹も近く紅梅もいとよく通ひぬべきたよりなりかしまかでて聞けばあやしき家の見どころもなき梅などには花やかにぞ鳴く夜なかぬもいぎたなき心地すれども今はいかがせん（枕草子）

【一六〇】はぎの花女郎花くररりんだう眞葛の這ひ歩きたらんに夕をまたで鳴きさかる蟲のこゑごゑ名もしらぬ小草の花花露霜にもみづる淺茅原木枯にちりかかる何くれの廣葉のからからと音してそことはてなく走り行くも山の紅葉のから錦なるをも悲しとのみは誰も眺むまじきをや木の葉の落つるは

下より惠つのぐむからぞと言ひしを思へば天地のままのあはれを怨みつべきことかは　（藤簍冊子）

【一六一】木高き松に枝かはせる楓の色こがるばかりにそめなせるはまことにもろこしの清き入江にさらせる錦も及ぶまじくてさらでだに憂してふ事は聞きも見もせぬわたりには斧の柄もくたしつべくおぼゆるをましてかく染めつくせる木のもとをばいかがは立ちうからざらむ　（うけらが花）

【一六二】霞みていにし雲路のなごりなくおぼえしを秋霧のうへに聲聞きそむるがよにめづらかなる事はさらにもいはじすべて四つの時花鳥の色香にそへてはかなき言の葉をのばへすずろなる心を動かしつべきくさはひ多かる中に世をうらみては人の心の秋をかなしみうきをなげきては中空に物をおもひ遠づまをしたふとては玉梓のたよりを待ち雲水に身をたぐへては此の世をかりとたどるも折にふれ事につけつつあはれさ似るものなくこそおぼゆれ　（琴後集）

【一六三】柳はひろき庭の池のほとりなどにうゑわたしたるはさらなり門のあたり生ひたてるがほのかに開けたるまゆを行手に見わたしたるいみじうなつかしく住む人さへゆかしくぞおぼゆる昔は都の大路のたてぬきにいとおほく植ゑられたりとかげに櫻にこきまぜたらむ春の錦はまたしくものあるまじうこそ　（樞園文集）

【一六四】 あきびとのおのれらは利をわざとするものなればものまなびしても清き心ぞなし難きといふあさましき論なり物滯らずたよりよくなりもてくるが利なればたれかこれをあしといはんただこれを心にあてておのれにたよりなければすべきもせずたよりあればすまじきもすればこそあしとはいへさればすべきをしておのづからたよりあらんをば賢きもよろしと定めき （とはずがたり）

【一六五】 手習ふわざばかり心ゆくものはあらじ春秋のうつりゆくも知らで過ぎぬめり花もやうやう盛り過ぎぬる頃春雨降りつづきてをさをさ人も來ねば例の本ひらきて手習ひたるに永き日もはや入相の鐘聞ゆれば龍池の柳色はなど書きすさび

つつつれづれなるも忘れはてぬいと暑き日池の面をながめて水無三伏夏など書きすさびたるに涼しき風のさと吹ききたるもをかし （天朝墨談）

【一六六】 始あるものの終ある理はしらぬ人もなけれどあふをよろこび別を悲しむはかしこきも愚なるもかはる所あらじかし四つの時の序も花は根に鳥は古巣に歸るをはじめてみそぎにすつる夏の夕暮蟲の音のかれがれに尾花が袖のしをれゆくもみなあはれなるにとりて一とせの遂に暮るるこそ言はん方もなけれ （閑田文草）

【一六七】 人を責むるはあらはなるを責むべしとか聞きしまづ

面あらためたらば善しとこそいはめかれは虎の皮着ぬる羊なりとはいはじ羊にもせよ虎の皮着たらば虎にしてこそ養はめさらば千里をば走らずとも羊の力のおよぶだけは走りもしなん外を責めて内を責めざれと昔より聞きしを　（花月草紙）

【一六八】夏もやうやう深くなりぬれば木として繁らざるはなく草として榮えざるはなく日々に物を引延ぶるやうに見えてひたすらに緑の色深き夏木立こそ花にもをさをさ劣るまじけれ春の花は所々に咲きて稀なり夏は山も里もあるとしある草木ごとに打ちはへて皆緑の色なれば春に異なる眺なり八千草に植集めてなづさひし前栽の草木ども雨をおびておのおの其の梢をあらはし所得顔に心に任せて生茂れるもうれしと見ゆ

（樂訓）

【一六九】世の中ほど思ふやうならぬものはあらじ貨は國の命たるを知らざる人は妄に使ひすてて代々の貨をも失ひ又貨は國の本たるを知れる人は吝にして貨さへあらばと思ひて世の有様あしくなりゆくを知らずと或人悲みて語りき　（たはれぐさ）

【一七〇】未熟にしてわれこそ熟したれとおもへる人はおろかにぞ侍る修し得たる覺もなくて上手になるべき道理はあらじと我とわが心をさがしてあやまりをしるべし修業なき人の器用一ぺんにて及ぶべき事にもあらず又智惠才覺をもて至るべき道にもあらじ　（ひとり言）

【一七一】おのれ既に六十の坂登りつめたれば一期の月も西山に傾く命又ながらへて歸らんことも白河の關をはるばる越ゆる身なれば十府の菅菰の十に一つも覺束なしと案じつづくる程にほとんど心細くて家々の鷄の時を告ぐる聲もとつてかへせよと呼ぶやうに聞え畠々の麥に風のそよ吹くも誰ぞ招く如く覺えて行く道もしきりに進まざればとある木蔭に休らひて痩骨さすりつつながむるに柏原はあの山の外雲のかかれる下あたりなど押しはかられて何となく名殘をしさに

思ふまじ見まじとすれど我が家かな（おらが春）

す さす しむ

【一七二】やがて彼處にてうせさせ給へり夜のうちにこの北野にそこらの松をおほさしめ給ひて渡り住み給ふこそは只今の北野宮と申してあら人神におはしますめればおほやけも行幸せしめ給ふいとかしこくあがめ奉り給ふめり筑紫のおはしましし所は安樂寺といひておほやけより別當所司などなさせ給ひていとやんごとなし（大鏡）

【一七三】夏の頃水無瀨殿の釣殿に出でさせ給ひて氷水めして水飯やうのものなど若き上達部殿上人どもに賜はさせて大御酒まゐるついでにもあはれ古の紫式部こそはいみじくはありけれかの源氏物語にも近き川の鮎西川より奉れるいしぶしやうのもの御前に調じてと書けるなん勝れてめでたきぞとよ只今さやうの料理つかまつりてんやなど宣ふを秦の某とかいふ

御隨身高欄のもと近く候ひけるが承りて池の汀なる笹を少し敷きて白き米を洗ひて奉れり拾はば消えなんとにやこれもけしかるわざかなとて御衣ぬぎてかづけさせ給ふ（增鏡）

【一七四】橋本といふ所に行き着きぬれば聞きわたりし甲斐ありて氣色いと心すごし南には潮の海あり漁舟波に浮ぶ北には湖水あり人家岸に連れりその間に洲崎遠くさし出でて松きびしく生ひつづき嵐しきりに咽ぶ松の響波の音何れと聞き分け難し行く人心を傷ましめ泊る類夢を覺さずといふことなし湖に渡せる橋を濱名と名づく舊き名所なり朝立つ雲の名殘何處よりも心細し

行きとまる旅寐はいつも變らねどわきて濱名の橋ぞ過ぎ

うき（東關紀行）

【一七五】すずりはや石の滑かなるをよしとす石なめらかなるはただに玉にたぐひす玉はや價かぎりなく貴しと云ふも月なき夜をてらす光のむなしく目を喜ばしむには過ぎざるべし硯はや墨に筆に心あはせつつ古のことのままをしるしつたへつつ後に教ふるまめものの光こそ劣りたれいかで玉の弟とや云ふべき（藤簍冊子）

【一七六】うたへを聽くわれなほ人の如し必ずうたへなからしめんかといへるはひじりの志なりさればやまひをいやすことわれなほ人の如し必ずややまひなからしめんかと志すはくす

しのめてたきなるべし（とはずがたり）

【一七七】躍はかたちより心を狂はせ心よりかたちにまよふわらんべの品よきには闇たどる親の夜もすがらつきまとひあるはあらをのこのさまざまに出立ちたるけうとくもをかし顔つつみたれば誰ともしらず見る人にたちよりて我ぞと人に語りなせそとささやきなんどしたるはしらせ顔にて又をかしあるは身もおしさげがたき女の帯帷子など取出してすがたを人にをどらせ見るもやさし（ひとり言）

る らる

【一七八】つれづれに思さるる折々は廊めく所に立ち出でさせ給ひて遙に浦のかたを御覽じやるにあまの釣船ほのかに見えて秋の木の葉の浮べる心地するもあはれにいづくをさしてかと思さる

心ざすかたをとはばや浪のうへにうきてただよふあまの釣船

浦こぐ船の楫を絶えとうち誦じて御涙のこぼるるを何となく紛はし給へるいふよしなく心深げなり（増鏡）

【一七九】東山のほとりなる住家を出でて逢坂の關打過ぐる程に駒引きわたる望月の頃も漸く近き空なれば秋霧立ちわたりて深き夜の月影ほのかなり木綿附鳥かすかにおとづれて遊子猶ほ殘月に行きけん函谷のありさま思ひ出でらる（東關紀行）

【一八〇】 あはれ都にありつる程はあからさまながら年のはに故郷に歸りなどしければさのみもあらざりしを今はたはやすくも歸るまじく思ひなしつれば千里の遠に老いたるたらちねを置きまつりてとみの事ありともいかでか知らん知るとも如何でかとみに行きいたらん今やいかなる事かあらんいかなる心にかますらんなど人やりならぬ胸さわがれつること日ごとにありしを世のさがはあはれなる物にてうつたへに忘るとはあらねども友がきもいで來て高きいやしきゆきかひしけるに二つなき心のまぎれやすくて過しぬ此の秋はいざなふ人さへあればいでや母をもをがみつま子はらからにも逢はばやとて後の七月八日つとめてたちいづ （岡部日記）

【一八一】 大かた此の調度のもてなしにもあるじのこころのおしはからるるなりいつもちりばみけがれて火いれの灰きたなげにきせるあかづきとどこほりがちなるもにくくさへぞあるきららかにみがきなしてきよげなるはのむ心ちもよしかりとて餘り心をいれてちりもゐさせじともてあがめたるもこれのみにやくらすらむと心づきなし （おもひぐさ）

【一八二】 月はいと花やかに澄みわたるほど宮人のかくる栲ひればかりの雲もなびかず星の林のもみぢもこよひの光にはまけたりな風いささか吹きいでて波のあやいとよう見極めらる暮れはてぬれば続れる山はをぐらうなりて淡路さすがに見えずなりぬ （藤簍冊子）

【一八三】 山ぎはたどり行くほど大井の川水まぢかう見わたされて波間をくだす瀬々のいかだはただ錦をつむかと目とどめらるれば待てことはむなど口ずさみつつ行くにやがて御幸橋とかいふなるをわたれば嵐の山はただ手にとるばかり近きに入日ほのかにほひて空さへこがるばかりなるが山風はるかに吹きおろして道もさりあへぬまでちり來めるはまたたぐひやはとぞおぼゆめる（琴後集）

【一八四】 歌はこの國のおのづからなる道なればよまむずるやうかしこからんとも思はずけだかからんとも思はずおもしろからむともやさしからんともめづらしからんともすべてもとめて思はずただいまおもへることをわがいはるる詞をもてこ

とわりの聞ゆるやうにいひいづるこれをうたとはいふなり（布留の中道）

【一八五】 勝つことをこのむは人情の常まされるをにくむは人欲のつねなりこの故に材藝ある人は猶ほ慎むべし木林を出づれば風かならず折るといへり近頃材智は身の讎と云ふこころを中院通躬卿の御歌とてうけたまはり侍りし

人に見よおのがえならぬ花の香にをりつくさるる梅の下枝（梅園叢書）

【一八六】 姨捨山は八幡といふ里より一里ばかり南に西南によこをりふして冷じく高くもあらずかどかどしき岩なども見え

ず只哀ふかき山の姿なりなぐさめかねしと云ひけむもことわり知られてそぞろに悲しきになにゆゑにか老いたる人をすてたらむと思ふにいとど涙落ちそひければ

俤や姨ひとりなく月の友　（芭蕉翁文集）

【一八七】鰹は芥子鮓の風味上戸は千金にかへむとも思ふらむを鎌倉の海の素性を兼好に言ひ探されたるいと口をし鰹節となりては木の端のやうにも思はれずその梢とも見えずして花の名をさへ世に散らしぬる　（鶉衣）

たし　まほし

【一八八】あすはひの木この世近くも見えきこえず御嶽に詣でて歸る人などしか持てありくめる枝ざしなどのいと手ふれにくげに荒々しけれど何の心ありてあすはひの木とつけけんあぢきなき兼言なりや誰にたのめたるにかあらんと思ふに知らまほしうをかし　（枕草子）

【一八九】八月晦日がたに太秦にまうづとて見れば穂に出でたる田に人多くてさわぐ稻刈るなりけり早苗とりしかいつの間にとはまことげにさいつころ賀茂に詣づとて見しが哀にもなりにけるかなこれは女もまじらず男の片手にいと赤き稻のもとは青きを刈りもちて刀か何にあらんもとを切るさまのやすげにめでたき事にいとせまほしく見ゆるや　（枕草子）

【一九〇】世に名高き所などをば外なるをもしひておのが國おのが里のにせまほしがるならひにてただいささかのよりどころめきたることをもかたくとらへてしひてここぞといひなしてしるしを作るたぐひなどはたよに多きをさる心してまどふべからず（玉かつま）

【一九一】年のねびまさるにつきて過ぎこしかたの悔しさぞ事の外に多かるいはけなき年頃はらからどちなれむつびけるもよろづ爭ひがちにて賢きがあたりへは疎くよりそはまほしと願ふ頃はあるは長き別となりあるは海山を隔てて相慕ふその頃はさかりにていみじく教へきこえたるたらちねも養はんとすればすでにおはさぬぞいとせんかたなき（とはずがたり）

【一九二】秋は西といはまほしけれど入日影きらきらとさし入りたるはいとさびしく筆も硯も投げやりつべき心地してまし山高く築きもみづべき木などうゑたらむもあながちなるべきにや短き日はともかくも過してともしびのもとにて手習ひたるぞよき蟋蟀のかたへさらず夜すがら鳴きたるに時雨のさと降り過ぐるなど（天朝墨談）

【一九三】折待ち得たる杜鵑の初音まづなつかしくて鶯のなく音すでに老いにたるに代れる心地ぞすなるもろこし人は杜鵑の聲きく事を惡めども我が日の本にては昔より之をあはれみて歌にも多く詠めり夜もすがら空もとどろに鳴きわたれども聞く人みなあなかまとは思はず多からぬ所は今一聲だに聞か

まほし又鳴き行く方の人も待ちなんと思へば過行くも更に恨むべからず（樂訓）

【一九四】我儕古人をしたひて其の書をよみ其の心をしりつつ常に世をへたる恨あるに月ばかりこそ世々の人を照し來て今にあれば古人の形見ともいふべしされば月に對して昔を忍びてはさながら古人の面影もうつるやうに覺え月はものいはねども語るやうにもおぼえ忘れてはむかしの事をとはまほしくもおもふぞかし（駿臺雜話）

ごとし

【一九五】くれはてて由井の宿にやどる今夜ばかりはまたもあらじ夜ふかく月に濱づたひせんとて立ちいづ月は海ごしの山のは近くなりて波の上は鏡の如く平らかにあきらかなれば三保が崎伊豆の山々殘りなく見わたさる入江のむらの八聲の鳥も耳なれぬここちせらる

しどろなる里のわらやの數見えて明けゆく月に鳥がねぞする（岡部日記）

【一九六】やがて月のみ舟とともにかよりかくより木の葉なすみだれ出づめる舟屋形に百の物の音ならしたつれば月の光もいやてりまさりて水の面は櫛笥にのする鏡の如しげに橋の名をふた國といへるは武藏と下總とのあはひなればなり河の名をすみだ河とおほせしは月の影と物の音とによれりとこそい

ふべかりけれなどいひあへり（うけらが花）

【一九七】詠歌大概に情は新を先にすといふことを何くれといへどこは彼の日々に新なるといふ心ばへにて流るる水のごとしされば善きを悪しく悪しきを善くなどひき違へいふは珍しきにて新しきとはいはじ花を雲と見雪を花と見る幾度いふとも我がまことよりいへばいつも新し心してわざといふは新しきといふものならず（花月草紙）

【一九八】梓弓はる立ちしより年の暮れ行くまで射るが如くにおもほゆれば時日のはやく過ぎ行くは止めあへずむべもとしと名づけ又ときと言へるならんされば光陰箭の如く時節流るるが如しといへるもうける事にあらず（樂訓）

【一九九】貧しき人富める人の隔あるべからず曹子建が詩に

十指有長短痛惜皆相似

といへり小指は母指よりほそく母ゆびは中指より短しといへども其の病をうくるに臨んでは小ゆびの痛も母指のいたさも皆異ならず富貴の人の榮辱にあふも貧賤の人の榮辱にあふも富貴の人の憂苦も貧賤の人の憂苦も十の指の長き短き違ひはあれどその病異ならざるが如く人に貴賤貧富の差等はあれど憂苦哀樂の違あるべからず（梅園叢書）

【二〇〇】此の寺の方丈に坐して簾を捲けば風景一眼の中に盡

きて南に鳥海天をささへ其の陰うつりて江にあり西はむやむやの關路をかぎり東に堤を築いて秋田に通ふ道遙に海北にかまへて浪打入る所を汐こしと云ふ江の縱横一里ばかり俤松島にかよひて又異なり松島は笑ふがごとく象潟はうらむがごとし寂しさに悲しみをくはへて地勢魂をなやますに似たり

象潟や雨に西施がねぶの花　（奥の細道）

標準國文問題新選　終

昭和十四年二月二十一日印刷
昭和十四年二月二十五日發行

▼標準國文問題新選▲
正價金五十錢

編者　東京市淀橋區西大久保二丁目二三六番地　塚本哲三
發行者　東京市神田區錦町一丁目七番地　株式會社有朋堂　代表者　三浦正
印刷者　東京市神田區錦町三丁目廿二番地　佐久間修三
印刷所　東京市神田區錦町三丁目廿二番地　合資會社有朋印刷社
發行所　東京市神田區錦町一丁目　振替口座東京七一四八番　株式會社有朋堂

388
197